

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020

清流の国ぎふ芸術祭
Art Award IN THE CUBE 2020

IN
THE
CUBE
2020

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2020

2020.6.2-7.5

目次
Contents

004 ごあいさつ
Foreword

006 開催概要
General Information

審査員・講評
Judges・Comments

009 遠藤 利克
ENDO Toshikatsu

010 川口 隆夫
KAWAGUCHI Takao

011 篠原 資明
SHINOHARA Motoaki

012 高嶺 格
TAKAMINE Tadasu

013 福岡 伸一
FUKUOKA Shinichi

014 藤森 照信
FUJIMORI Terunobu

015 村瀬 恭子
MURASE Kyoko

第1章 – 図版
Chapter1 – Catalogue

019 占部 史人
URABE Fumito

023 ADRIAN O.SALES
エイドリアン オー サレス

027 大西 康明
ONISHI Yasuaki

031 大貫 仁美
ONUKI Hitomi

035 笠原 巧
KASAHARA Takumi

039 川角 岳大
KAWASUMI Gakudai

043 北川 純
KITAGAWA Jun

047 高橋 臨太郎
TAKAHASHI Rintaro

051 竹中 美幸
TAKENAKA Miyuki

055 宙宙
chuchu

059 橋本 哲史
HASHIMOTO Satoshi

063 平田 昌輝
HIRATA Masaki

067 御宿 至
MISHIKU Itaru

071 森本 孝
MORIMOTO Takashi

075 保良 雄
YASURA Takeshi

079 山本麻璃絵 + 姫野亜也
YAMAMOTO Marie + HIMENO Aya

083 Yuni Hong Charpe
ユニ ホン シャープ

087 W.N.project
ワンニャー プロジェクト

第2章 – 記録
Chapter2 – Document

092 募集から審査までの記録

096 作家支援・AAICサポーターズ（ボランティア）活動

097 関連プログラム

100 展覧会概要

101 新型コロナウイルス感染症対策

102 オープニングセレモニー
表彰式

第3章 – 資料
Chapter3 – Data

104 スケジュール

105 広報

108 運営体制

110 来場者アンケート

112 企画委員長 総評
Project supervisor's Comment

「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE」は、69回の歴史を刻んだ岐阜県美術展を刷新し、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的として創設した、3年に1度開催する全国規模の企画公募展です。

2回目となる今回は、作品の自由度を高めるため壁や天井のないキューブによる作品も可としたほか、会場を県美術館と隣接する県図書館の庭園に拡大するなど、前回から大きく進化しました。これにより、海外55作品を含む710作品の応募をいただくなど、大いに存在感を高めることができました。

一方で、展覧会は、新型コロナウイルス感染症が広がる中での開催となりましたが、会期の変更やオンラインでの審査会開催など工夫を重ねつつ、文化芸術を楽しむ新しいかたちを示すことができたと思います。

作品応募者、審査員、企画委員など関係者の皆様、展覧会に足をお運びいただいた多くの皆様のご支援・ご協力に、改めて感謝申し上げます。

また、今回、入選されました作家の皆様が、このAAICを契機として、全国そして世界へ羽ばたいていかれることを祈念するとともに、本展覧会が、岐阜県の文化芸術の更なる発展に寄与することを心から願っております。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
名誉会長 岐阜県知事 古田 肇

Foreword

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE is a nation-wide open-call exhibition project held once every three years and was created as a new take on the Gifu Prefecture Art Exhibition, which had been held 69 times in the past, in the aim of goal of unearthing and fostering new, immensely creative talent. This second holding of the exhibition developed beyond the previous exhibition by accepting pieces in cubes not bound by walls or ceilings to allow artists more creative freedom and also by expanding the venue to the Gifu Prefectural Library's garden next to the Museum of Fine Arts, Gifu. As a result, we were able to give the exhibition a much greater presence and received applications for 710 pieces, including 55 from overseas. The exhibition was held against the backdrop of the spread of COVID-19, but through measures such as changing the exhibition period and holding the meetings of the judging committee online, I believe that we were able to exhibit a new way of enjoying art and culture. I would like to express once again my gratitude to the applicants, judges, planning committee, and all of the others involved, as well as the many who came out to view the exhibition, for their support and cooperation. Furthermore, it is my sincere hope both that this AAIC will have served as an opportunity for the artists who were selected to participate this time to step out onto the artistic stage of Japan and the entire world and also that the exhibition helps the art and culture of Gifu Prefecture to develop yet further.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE
Executive Committee

Governor of Gifu Prefecture Furuta Hajime
Honorary Chairman

当初4月18日から6月14日までの開催を予定していた「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020」は、全国的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、一時は開催自体が危ぶまれていましたが、事前の来館予約、岐阜県感染警戒QRシステムへの登録など、様々な感染拡大防止対策にご協力いただきながら、6月2日から7月5日までの30日間で、7,759人もの方にご鑑賞いただけたことを大変嬉しく思います。実際に展示いただいた18組の作家の皆様には、新型コロナウイルス感染症により制作が難航したり、開催の見通しが不透明であったりと様々な問題がございましたが、開幕に合わせて、今回のテーマである「記憶のゆくえ」を表現した大変魅力的な作品を完成いただけたことを、心から感謝申し上げるとともに、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。最後に、本展覧会の開催にご支援ご協力を賜りました全ての皆様に深く感謝申し上げます。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
会長 土屋明之

Foreword

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2020 was originally planned to be held from April 18 to June 14, but there was a period where it uncertain whether the event could be held as the impact of the spread of COVID-19 was felt in Japan. That being said, I'm extremely happy to report that 7,759 people were able to enjoy the artwork during the 30-day period from June 2 to July 5 while cooperating with various infection prevention measures, including advance viewing reservation systems and the Gifu Prefecture QR Code Infection Alert System. COVID-19 was a cause of various problems for the 18 artists or groups of artists who actually exhibited their works, such as difficulties in production and concerns as to whether the event would be held. With that in mind, I am incredibly grateful to all of the artists who completed many simply enthralling pieces expressing the event's theme, "Kioku no Yukue (Where Our Memories Go)" in time for the exhibition's opening and would like to offer my best wishes for the continued success of their endeavors going forward. On a final note, I would also like to sincerely thank everybody who offered their support and cooperation to make this exhibition possible.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE
Executive Committee

Tsuchiya Akiyuki
Chairman

開催概要

名称	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020
目的	・新たな才能の発掘と育成 ・アートに関わる人材の育成とネットワークづくり ・新たな形のアートの鑑賞機会を提供
テーマ	「記憶のゆくえ」
作品条件	4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)のキューブ空間で展示できること。
会期	2020年6月2日(火)から7月5日(日)まで(開館日:30日間)
会場	岐阜県美術館(岐阜県岐阜市宇佐4-1-22) 岐阜県図書館(岐阜県岐阜市宇佐4-2-1)
展示数	18作品
審査員	遠藤 利克 彫刻家 川口 隆夫 ダンサー・パフォーマー 篠原 資明 詩人・美術評論家／高松市美術館館長 高嶺 格 美術家／多摩美術大学教授 福岡 伸一 生物学者／青山学院大学教授 藤森 照信 建築家／東京都江戸東京博物館館長 村瀬 恭子 画家／多摩美術大学教授
主催	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会、岐阜県

General Information

Name	Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2020	
Purpose	- To discover and nurture new talent. - To train people related to art and to create a network. - To offer opportunities for appreciation of new forms of art.	
Theme	“Kioku no Yukue (Where Our Memories Go)”	
Conditions	Submitted works must be displayable in a cuboid space measuring 4.8m (w) x 4.8m(d)x 3.6m (h).	
Exhibition period	June 2 (Tue.)–July 5 (Sun.) 2020: Open for 30 days	
Venue	The Museum of Fine Arts, Gifu (4-1-22 Usa, Gifu City Gifu Prefecture) Gifu Prefectural Library (4-2-1 Usa, Gifu City, Gifu Prefecture)	
Number of exhibits	18 Works	
Judges	ENDO Toshikatsu	Sculptor
	KAWAGUCHI Takao	Dancer and performer
	SHINOHARA Motoaki	Poet and art critic／Director of Takamatsu Art Museum
	TAKAMINE Tadasu	Artist／Professor at Tama Art University
	FUKUOKA Shinichi	Biologist／Professor at Aoyama Gakuin University
	FUJIMORI Terunobu	Architect／Director of Edo-Tokyo Museum
	MURASE Kyoko	Painter／Professor at Tama Art University
Hosts	Executive Committe of Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2020, Gifu Prefecture	

審査員・講評

Judges・Comments



遠藤 利克

彫刻家

ENDO Toshikatsu

Sculptor

一次審査講評

プランと実作のあいだの試行錯誤の中に、
作品制作に関わる一番重要な要素、あるいは秘密が潜んでいる

選考作業を重ねていく過程で、応募者の意図への理解が進み、それなりの公正な選考はできたのではないかと考えています。

選考の過程でみてきたのは、書類選考という方法の限界性です。その限界性自体は、マケットがあったとしても変わらない種類のものです。限界と感じられる最重要事項は、実際に作品が完成した時の作品としての作品度というか、それぞれの作品が

もたらず感動の質のようなものを、どうしても測りかねるということです。私は、プランと実作のあいだの試行錯誤の中に、作品制作に関わる一番重要な要素、あるいは秘密が潜んでいると考えます。しかし、プラン提出による公募制という方法においては、視野に限界が生じざるを得ないことも確かです。とはいえ、選考方法にさらなる工夫、さらなる改良を望みたいところではあります。

二次審査講評

概念的枠組みの突破

われわれは言語的存在であり、それゆえに、美術作品といえども概念的枠組みの包囲を免れることはできない。とはいえ、作る側にとっても、見る側にとっても、美術作品は、生の全体性として体験される時にのみ、固有の質として現れ得るといえる。

そして、全体性的体験に至ることを目途とするかぎり、ほんの僅かではあってもその枠組みを突き抜けて、向こう側の次元へと出現することが要請される。一定のサイズのキューブが条件として与えられ、各作家の思考はより明確なものとして伝播する。

それがこの企画のユニークなところだが、今回展で明らかになったのは、“概念”の枠組みを突破することの困難さの方であった。

唯一、川角岳大の「私たちの知らない犬」のみが、その壁、つまり“説明の言語”の壁を微かながら超えていきそうな気配を漂わせていて、希望を懐かせた。今後、突き抜けた向こう側に広がる領域こそが、エロチシズムの時空であるという、薄明の知覚が訪れるならばと・・・。

**川口 隆夫**

ダンサー・パフォーマー

KAWAGUCHI Takao

Dancer and performer

一次審査講評

私たちの知らないところで記憶、記録、歴史が
消され書き換えられようとしていることへの抵抗かもしれない

子どもの頃僕は、この世界が今しがた一瞬にして
出現した、というオブセッションにとらわれていた。
空も山も川も地層も化石も、複雑な社会も人間関係
も、自分の記憶さえも、あらゆるものがプロセス
なしに一瞬のうちに生成されてしまった…？
そんな妄想は別にして、今回のArt Award IN THE
CUBE 2020 では時空の広がりを一気に一点に
凝縮したような、あるいは一刀両断にして切り出して
みせる作品コンセプトがいくつかあり、その鮮やかさに

想像力を刺激された。
また一方で、いくつかのプロセスを経て記憶を書き
留めよう、あるいは創り出そうというものも、少な
くはあったように思う。複数の視点から言葉や動き、
風景を重ねつなぎ合わせて自分たちの物語を自分
たち自身の手で紡ぎだすという提案は僕にとって
とても新鮮だった。私たちの知らないところで記憶、
記録、歴史が消され書き換えられようとしている
ことへの抵抗であるのかもしれない。

二次審査講評

解き放たれたファントムロボット

プシューッ音とともにオープンキューブ内に宙づり
になったいくつかのエアポンプがわずかに伸縮し、
連結されたワイヤーが引っ張られて奇妙なジャングル
ジムのような構造体が蠕動する。手足を失った人が
ないはずの手足に感じる感覚(幻肢痛)の神経伝達
信号に反応して動くこのファントムロボットが、
ひょっとしたらそのままキューブから出て行って岐阜
の山々を登っていくのではと想像させワクワク。
繊細な動きや感覚の記憶が壮大な風景の中に解き

放たれて、爽快！これほど愛くるしくかつ切ない
ロボットを私は見たことがない。失われた四肢の
ダンス。私もこんなダンスが踊りたい。
AAIC2020 展全部を見終わってとにかく楽しかった。
来て本当によかった。世界は今、未曾有の危機に
直面している。そして駄目押しの非常事態。ようやく
開催にこぎつけた本展、そして本作は、窒息寸前の
私たちを優しさに満ちた爽やかな初夏のピクニック
へ連れ出してくれた。

**篠原 資明**詩人・美術評論家／
高松市美術館館長**SHINOHARA Motoaki**Poet and art critic／
Director of Takamatsu Art Museum

一次審査講評

さまざまな過去に対して、
どれだけの新しみを提案できるか

芸術の本質は、新しみつ振りかえることにある。
その場合、力点は新しむことにある。ただ、「記憶の
ゆくえ」をテーマとする今回の展覧会では、どのよう
な過去を振りかえるかを考慮せざるをえない。した
がって、どのような過去を、どのように新しく振り
かえるかが、課題となる。
各企画書が振りかえろうとする過去は、生命の過去
から神話的な過去、家族の過去から個人的な過去
にいたるまで、さまざまであった。ただ、日常的に

なじんできた過去もまた、振りかえりの対象となる
だろうし、使われなくなった素材も、振りかえりの
対象となるだろう。いにしへの芸術作品や、伝統的
技法も、同様である。このようにさまざまな過去に
対して、どれだけの新しみを提案できるかが、審査
に当たってのポイントとなった。幸か不幸か、700点
を超える応募の中から、18点を選ぶのは、ワタシの
場合、比較的容易であった。その分、仕上りの展
示が、大いに期待されるところである。

二次審査講評

コンセプトと作品とのあいだにある乖離を痛感

コンセプトと作品とのあいだに多少とも乖離がある
というのは、ありがちなことだが、今回の展示作を
目にして、あらためて痛感した次第である。ただ、素材
の選択と手法の点で、有無をいわせぬ独創性を感じ
させたのは、竹中美幸だった。映画用のフィルムという、
いまや過去の遺物に追いやられつつある素材を
用いて、光の痕跡と音の記憶を提示しようとした作品
は、記憶のゆくえというテーマにふさわしく、審査員
賞として推させていただいた。また、コンセプト審査

の段階では見過ごしていた保良雄の作品は、ピリッ
とした空間の中で、久しぶりにゾクッとした感動を
味わわせられた。そんな中、コンセプトも作品も
興味深かった例として、大西康明の展示も挙げて
おきたい。
ほかに、コンセプトは興味深いのに、実際の作品では、
うまく作動しないものや、あらが目につくものも
あった。意欲的な試みも多かっただけに、残念な
思いをしたことも言い添えておきたい。

**高嶺 格**

美術家／多摩美術大学教授

TAKAMINE Tadasu

Artist／Professor at Tama Art University

一次審査講評

作品が箱から大きくはみ出し、
無化されるという想像を掻き立てる

3m60cmというサイズ規定について。大き過ぎも小さ過ぎもなく、人間の身体スケールおよび箱の製作費用に鑑みて割り出した妥当なサイズであると思う。多くの経験を持つ作家は、このサイズを念頭に「空間の全体を満たす」形でプランを考案した。「インсталレーション能力」はここで求められていることでもあり、選ばれたプランの多くは空間全体をうまく使っている。しかし私が今回審査するに当たって最も煩悶したのは、その「器用さ」をどう評価

するかについてである。そもそも物理的な空間が必要ない、またはこのサイズには到底収まりきらないプランがある。「アイデアのスケール」が、設定された「空間のスケール」にそぐわないと思えるケースについて、この場でどう評価するか？個人的には、作品がこの箱から大きくはみ出し、ついには無化されるといった想像を掻き立てるプランをいくつか選んだ。サイズを規定する意義が、まさにそこに現れているように感じたからである。

二次審査講評

作品から離れて膨らむ想像力

（コロナで諸々の日程が変更になった。日程変更によって生じた個々の作家への影響については憂慮するものの、審査自体に特別な影響はなかったと思う。以下個別評と所感。）
山本+姫野氏の「石斧」。ザ・彫刻の素材（石と木）を使い、こんなに柔軟な表現ができるのかという驚き。一人で考え込んでいない空気感もいい。しかもその軽さ（実際の作品は重たいのに、なぜか軽い）を、作品のフォルムよりもむしろ態度で示している点が良い。川角氏。どの方角から見ても絵になるインсталレー

ション。「自分の飼っていた犬」にモチーフを集約するあたりを含め、状況を俯瞰的に見る視点と大胆さを持っていると感じた。
森本氏。アートの外から投げ込まれた爆弾のようで、作者の脳の薄皮をおそろおそろめくりながら鑑賞するような緊張感がある。コメントが難しいが最も困惑させられたため審査員賞とした。
他にも特筆すべき作品は多く、展覧会として充実していた。作品を見た観者の想像力が、定められた空間を離れてどれだけ膨らむかを基準に審査した。

**福岡 伸一**

生物学者／青山学院大学教授

FUKUOKA Shinichi

Biologist／Professor at Aoyama Gakuin University

一次審査講評

鮮やかな記憶とは、自己愛的回路の変形

物質としての生命体は、絶えず分解と合成を繰り返す危ういバランスー動的平衡ーの上にある。そんな中であってどうして記憶は“保持”され続けるのだろうか。それは、記憶が物質レベルにあるのではなく、物質と物質、あるいは細胞と細胞の関係性のレベルに存在するからだ。しかし、その関係性もまた、相補的な結びつきを維持しつつ、常に更新されていく。つまり、記憶が“保持”されていると感じるのは幻想でしかなく、記憶はいつもたった今作り直されていると

いってよい。鮮やかな記憶とは、自分が繰り返し呼び出し、彫像し、強化している自己愛的回路の変形といえる。そんな不確かな記憶のゆくえを、流れゆくもの、移ろうもの、揺れるもの、それでいて、ある種の幾何学的な秩序を示し、動的なさざ波を引き起こし、ときに美しくさえ見えるものとして具体化できた表現。そんな作品に出会えればうれしい。そう願って審査に臨んだ。

二次審査講評

記憶ははかない電氣的現象

与えられた直方体空間に作家がそれぞれ独自の小宇宙を創出してみせる。今年のテーマは「記憶のゆくえ」。
記憶とは何か。生物学的には、記憶に物質的な根拠は何もないことがわかっている。つまり、脳の奥深くにミクロなビデオテープが保存されているわけではない。むしろ記憶とは、思い出すたびに新たに作られるものであり、一回限りの、はかない電氣的現象にすぎない。
なので、生物学者としての私は、記憶を、動的で、

不安定で、たえず移ろいつつ、あやういバランスの上に現れるもの、一ちょうど宮沢賢治が言うところの「仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明」のような何か一、としてイメージした作品を面白いと感じ、審査することにした。一方で、記憶は、やがては必ず滅び去る私たちの人生を支えるなものかでもある。「記憶は死に対する部分的な勝利だ」これはカズオ・イシグロが私に教えてくれた言葉である。

**藤森 照信**建築家／
東京都江戸東京博物館館長**FUJIMORI Terunobu**Architect／
Director of Edo-Tokyo Museum

一次審査講評

キューブの中にあれば
すべては優れた作品になる可能性を持つ

街を歩いていると、道路を掘り返したり電信柱の上のほうに何か取り付けたりしている工事現場に出くわす。そして思う。もしこのシーンが美術館にあってインスタレーションと名付けられていたら、きっと私はそれを作品として鑑賞するだろうと。

街の中の解体時、工作的なシーンでなくとも、たとえばありふれた一本の樹を林の中から伐って、美術館の四角な箱の中に立てたら、きっと私はそれをシュールレアリスムの作品として鑑賞する。キューブ

の中にあればすべては優れた作品になる可能性を持つーそう思いながら審査し、目で見てもゴロっとして分かりやすい“石斧”と、その反対に体感でしか分からない“カタツムリ”の二つを実物で見て感じたい、と思った。

立体物を審査するとき、マケットがあれば理解しやすいが、現実的ではないのだろうか。

二次審査講評

想像を超えた表現の発想力

現代美術の審査は当たりハズレが大きく、一作でも心に残るものがあれば審査したカイがあるというもののだが、今回は〈石斧をモチーフにした石斧の彫刻〉と〈質量保存の法則〉と〈時間の溝〉が良かった。

猿の段階でも棒と石は道具として使われていることが判明しているが、棒と石を組み合わせで出来る石斧は、人類の段階で初めて出現し、人類は石斧を振るって以後の人間への道を切り拓いている

その石斧をテーマにしてこんなに変化に富み、かつ力強い表現が可能になるとは思ってもいなかった。人間と木（棒）と石、この三つの組み合わせの中には人が物を作ったり表現したりすることの本質が潜んでいる。このことを気付かせてくれる作品で、大賞に値すると思った。

〈質量保存の法則〉は、ベンチに腰かけて眺めていると、子供に帰ったような気分になり、飽きなかったのも、審査員賞とした。

**村瀬 恭子**

画家／多摩美術大学教授

MURASE Kyoko

Painter／Professor at Tama Art University

一次審査講評

触れたら手をすり抜ける幻のような瞬間を
どうにか留めようと創作の冒険を続けることになる

700点をも超える応募プランに目を通すにつれ記憶の波に溺れそうだった。海底に沈み込みもう何も見えない、と幾度も力尽きそうになった。今では私自身がゆくえ知れずの彷徨い人になってしまったようだ。どのプランも決して明確にそれを手に掴んではないと強く感じる、「記憶」というものは、触れたと思ったら途端に手をすり抜けて「ゆくえ」を眩ます生き物なのだろう。お陰で私たちはその幻のような瞬間をどうにか留めようと創作の冒険を

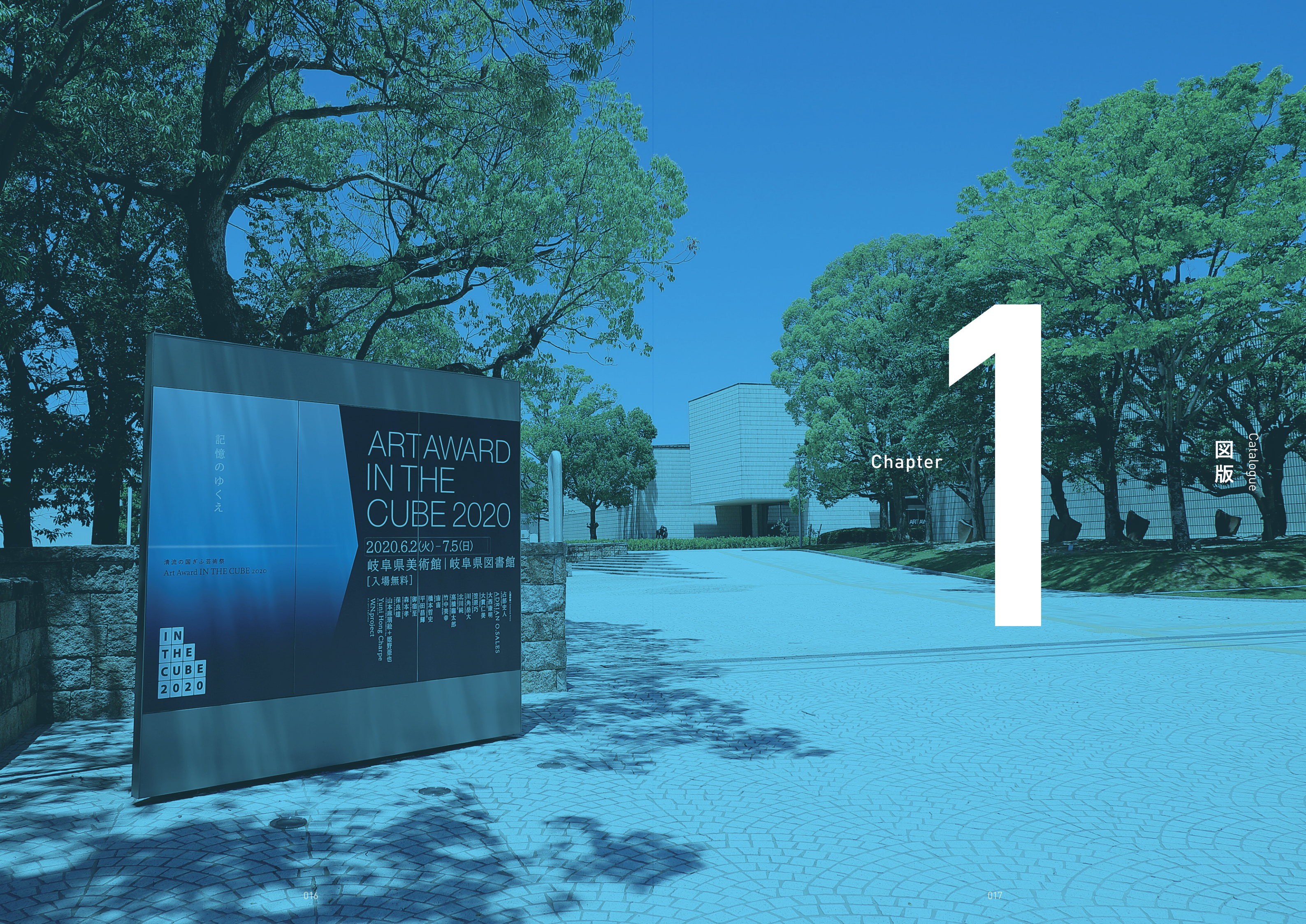
続けることになる。予想を上回る数の魅力的な平面プランと出会えた事も幸福でした。絵画は、それに対してうってつけのメディアであると信じているが実見せずにその現場を想うことはとても難しい。あらゆる表現においてコンセプトとプランでなにが分かるの!?とあなたも私も考えたりするけれど、もはや信頼と愛情と敬意をもって実際にキューブの中に立ち現れる作品をととても心待ちにしています。

二次審査講評

離れ難い空間

自粛生活から放たれ美術館に着くと「知人の家」のように CUBES が私を招き入れ、再会するような感覚だった。《そして、「宇宙の子」は、自ら造った「仄かに酔っている AI」と対決する。》へ入り込めば、微かに漂う電子音と書き留められた言葉が祭壇上?のおびたしい魂を見事に昇華させ、明日の方向を示していた。個人賞の《Repaet》では、正面の少女が私に語りかけ、奥の鏡に映る作者?が観客と同調していく構造に親密さが増し、左右に鏡面する

映像へのアクションもダイナミックで身体に宿る記憶がダンサーによってチャージングにリレーされ、離れ難い空間となっていた。プランとは異なる展開を見せた《私たちの知らない犬》に至っては、もはや「家」でもなくやたら見晴らしの良い「風景」がそこに立ち上がり、作家のジャンプ力がとても清々しかった。プリミディヴなエネルギーを信じたくなるような1日を過ごし、受け取った数々の記憶を細胞に反芻させながら豊かな気持ちで帰路についたのだ。



記憶のゆくえ

清流の国ぎふ芸術祭
Art Award IN THE CUBE 2020

IN
THE
CUBE
2020

ART AWARD IN THE CUBE 2020

2020.6.2(火)-7.5(日)
岐阜県美術館 | 岐阜県図書館
[入場無料]

企画人
ADRIAN OSALES
大澤雄明
笠原弘美
川島岳大
北川純
高橋謙太郎
竹中義幸
由田
橋本哲史
平田昌輝
御池至
森本孝
保良雄
山本麻南絵+松野雅也
Yumi Hong Charpe
WINProject

Chapter

図
版

Catalogue

入	選	占部 史人 《空とカタツムリ》	019
入	選	ADRIAN O.SALES 《WE GO ON》	023
入	選	大西 康明 《時間の溝》	027
入	選	大貫 仁美 《秘められた、その「傷」の在処》	031
入	選	笠原 巧 《無秩序の中の秩序》	035
遠藤利克	賞	川角 岳大 《私たちの知らない犬》	039
藤森照信	賞	北川 純 《質量保存の法則》	043
川口隆夫	賞	高橋 臨太郎 《Phantom container》	047
篠原資明	賞	竹中 美幸 《記憶の音》	051
入	選	宙宙 《cloud》	055
入	選	橋本 哲史 《こちら、1001》	059
入	選	平田 昌輝 《Artifact 19-2》	063
入	選	御宿 至 《SOMETHING GREAT ～記憶の風景～》	067
高 嶺 格	賞	森本 孝 《そして、「宇宙の子」は、自ら造った「仄かに酔っているAI」と対決する。》	071
入	選	保良 雄 《beclouded, becalmed, belighted》	075
大	賞	山本麻璃絵 + 姫野亜也 《石斧をモチーフにした石斧の彫刻》	079
村瀬恭子	賞	Yuni Hong Charpe 《Repeat》	083
福岡伸一	賞	W.N.project 《Light NOWーイマココ》	087

凡例 Notes

- ・清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020の出品作品を掲載した。
- ・制作年は、すべて2020年である。

Title

空とカタツムリ
Sky and Snail

Artist

占部 史人
URABE Fumito



カタツムリの殻の形態をした螺旋型の彫刻で、中に入ることができ、中から空を見ることができる。トロブリアンドの神話から着想された、人生の悲哀や世界の大きさをカタツムリの螺旋によって表現する作品。

This piece allows you to look to the sky from the inside of a spiral sculpture taking the shape of a snail's shell.
It illustrates the size of our world and the sorrow of the people living in it with the snail's spiral shape—an idea that came to me from the myth of the Trobriand Islands.





占部 史人 URABE Fumito

1984年愛知県生まれ。静岡県拠点。

Born in Aichi Prefecture in 1984 / Based in Shizuoka Prefecture.

2013 / 愛知県立芸術大学博士後期課程 修了

2013 / シャルジャ・ビエンナーレ11優秀賞受賞 / アラブ首長国連邦

2014 / 「個展」七つの夜の海 / 愛知県美術館 / 愛知県

2014 / 「個展」赤米の来た道 / James Cohan Gallery / 中国

2016 / 「個展」蜜の流れる大地 / GALLERY SIDE2 / 東京都

2018 / 水と土の芸術祭2018 / 新潟県

現 在 / 静岡大学 教育学部・地域創造学環アート&マネジメントコース講師

〈 作品制作協力 〉

井原麗奈、河村清加、名倉達了、林脩太、林七海、半田颯太、福宮杏悟

Artist's Comment

社会全体が大変な状況にある中で沢山の方たちのご協力を頂き、全力で作品制作に取り組む機会を頂いたことに感謝しております。自分自身の力不足で、空とカタツムリの神話が持つ世界の大きさを表現しきれなかったことを課題として、今後の作品制作に活かしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



Title

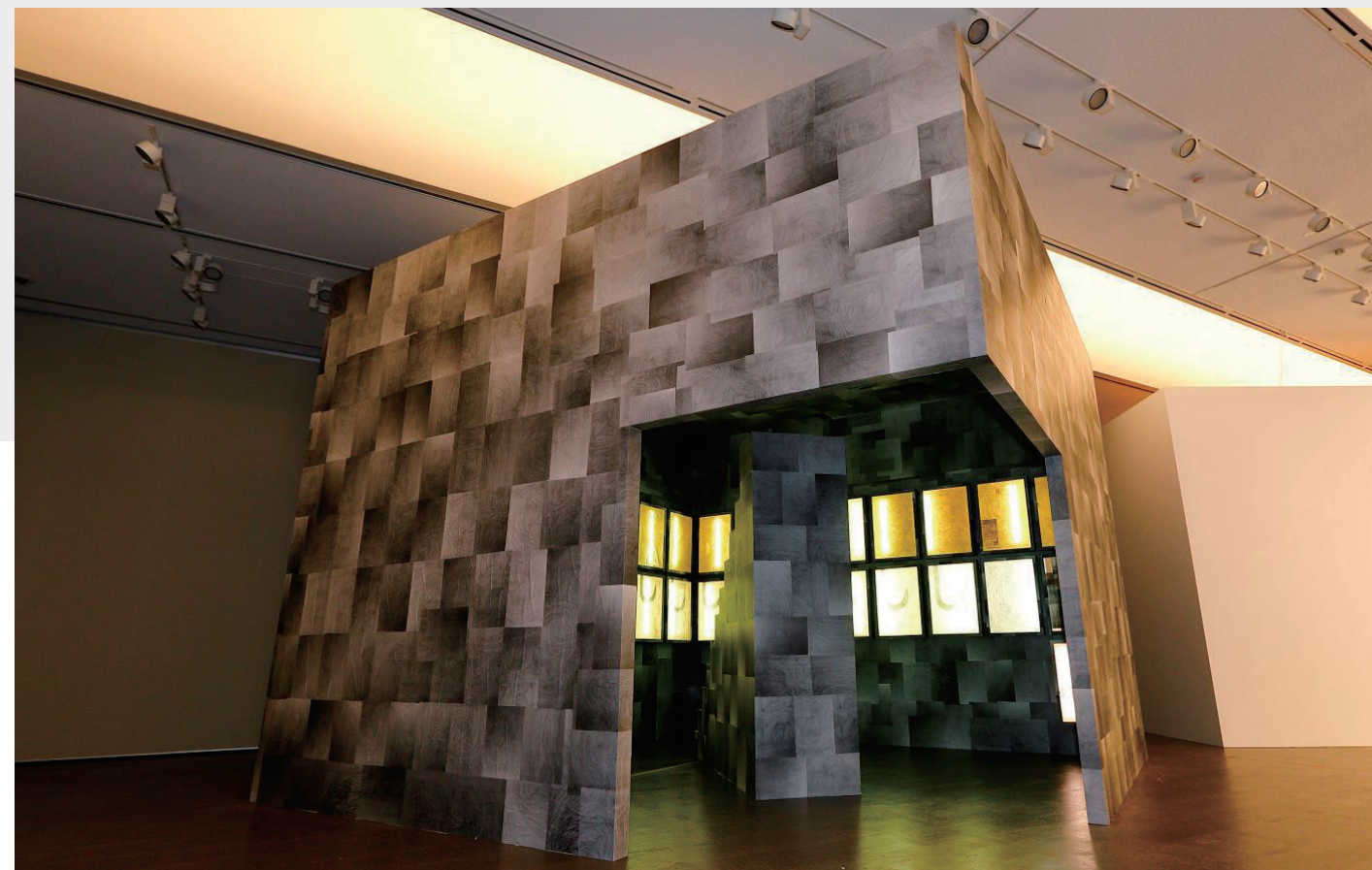
WE GO ON

WE GO ON

Artist

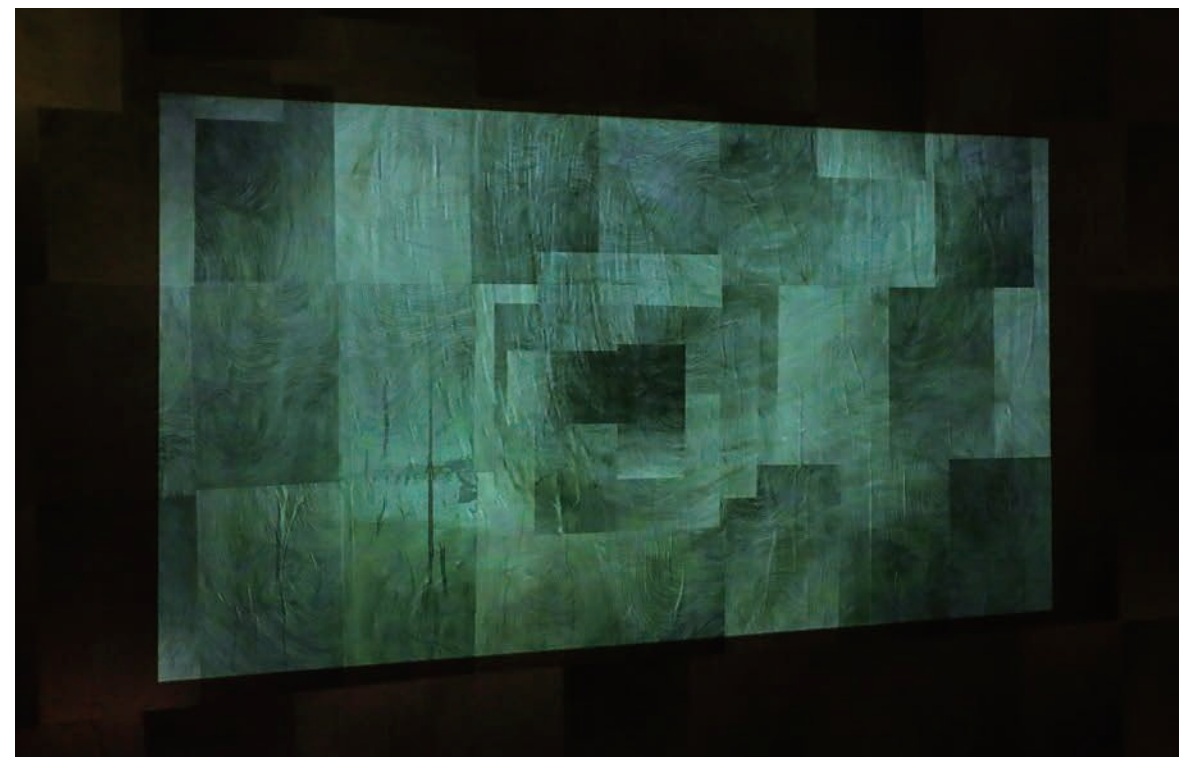
ADRIAN O.SALES

エイドリアン オー サレス



キューブの壁面などに人間の遺伝情報をモチーフとした映像を映し、キューブ内の階段からこれを見る。人間の記憶と人工知能が共同し、未来へと続いていく作品。

Video that has human genetic information motif is projected on the cubicle wall. Visitors see it from the stair in the cubicle. It is the artwork that human memory and artificial intelligent work together and will go on beyond the future.



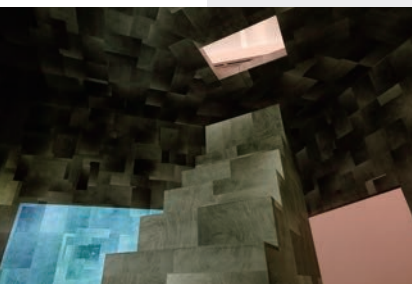


ADRIAN O.SALES エイドリアン オー サレス

1979年フィリピン生まれ。神奈川県拠点。

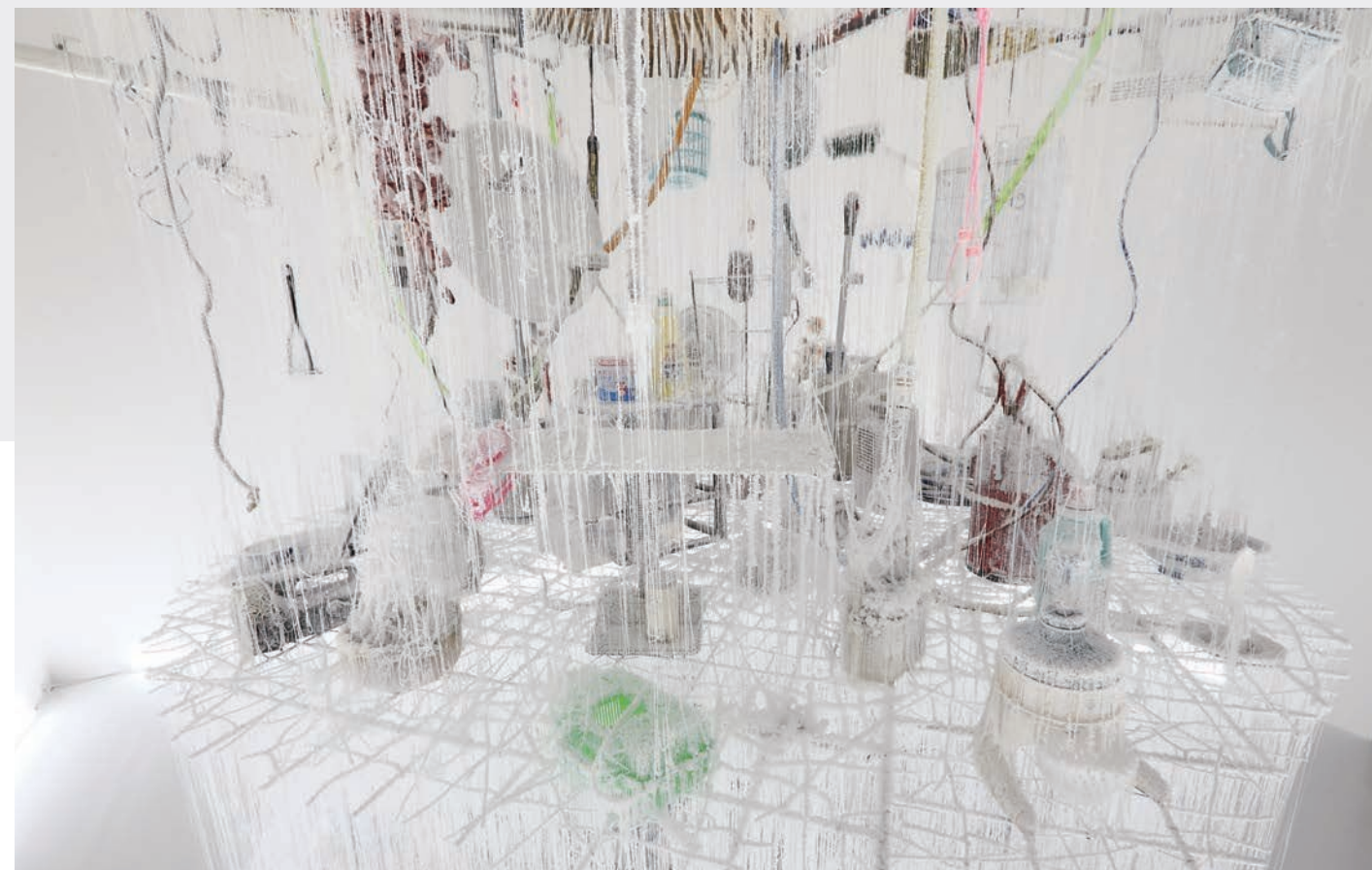
Born in Philippines in 1979 / Based in Kanagawa Prefecture.

2000 / TALIWAS SA ARAW (solo exhibition),
UP Vargas Museum, Diliman, Quezon City, Philippines
2001 / GYPSY PUGUE (solo exhibition), ANITA Gallery,
Casa San Miguel, San Antonio, Zambales, Philippines
2003 / NAKANPO SA POSITIBO (solo exhibition), ANITA Gallery,
Casa San Miguel, San Antonio, Zambales, Philippines
2010 / KASAKU AWARD, TOYAMA CITY ART FEST, TOYAMA CITY, JAPAN
2019 / CASA REJIDENCY EXHIBIT (group exhibition), ANITA Gallery,
Casa San Miguel, San Antonio, Zambales, Philippines



時間の溝 Ditch of Time

大西 康明 ONISHI Yasuaki



メッシュ構造の机の上に日用品を置き、その上から接着剤を垂らし、無数の垂直線と結晶による風景を作る。空洞や時間の経過から、人の手を離れた非日常や裏側の風景を見る作品。

Everyday items are placed atop a table of mesh construction, and from the top, an adhesive is dripped down to create a display of numerous vertical strings and crystals. This piece offers a glimpse of the unknown and the uncharted through unfilled cavities and the passing of time.





大西 康明 ONISHI Yasuaki

1979年大阪府生まれ。大阪府拠点。

Born in Osaka Prefecture in 1979 / Based in Osaka Prefecture.

2001 / 筑波大学 芸術専門学群技術専攻 卒業

2004 / 京都市立芸術大学大学院 美術研究科彫刻専攻 修了

2007 / 第1回秀桜基金留学賞によりヨーロッパ滞在

2011 / ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修

2014 / 想像しなおし / 福岡市美術館 / 福岡県

2017 / 「個展」空間の緑 / アートコートギャラリー / 大阪府

2018 / 水と土の芸術祭2018 / 万代島多目的広場 / 新潟県

2018 / 「個展」Hidden Landscapes / COCONICO Center for the Arts Flagstaff / アメリカ

2019 / Negative Space / ZKM Karlsruhe / ドイツ

〈作品制作協力〉

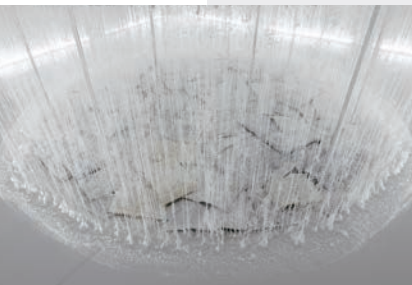
藤生恭平



Artist's Comment

この作品は「垂直の隙間」という木を天井から吊るし接着剤を垂らした作品から展開したものです。

白いキューブの中で本や日用品と組み合わせることは新しい試みであり、今後の制作へと繋がるものになると考えています。



Title

秘められた、その「傷」の在処

The whereabouts of the hidden “wound”

Artist

大貫 仁美

ONUKI Hitomi



ガラスで制作した、かつて誰かのものであったであろう衣服によって、ある人は覆い隠し、ある人は装飾し、ある人は剥き出しにし、ある人は気づくことなく「生きる」美しい「傷＝記憶」の物語を空間内に展開する。

These pieces are created from glass and symbolize the clothes that people may once have worn, telling the story of “scars as memories”. Some people conceal this beautiful notion, and others wear it on their sleeve; some expose it, and others “live” it without ever knowing.





大貫 仁美 ONUKI Hitomi

1987年千葉県生まれ。千葉県拠点。

Born in Chiba Prefecture in 1987 / Based in Chiba Prefecture.

2010 / 武蔵野美術大学 造形学部工芸工業デザイン学科ガラス専攻 卒業

2010 / 武蔵野美術大学卒業制作 優秀賞 / 東京都

2010 / via art 2010 審査員賞受賞 / 東京都

2012 / 武蔵野美術大学大学院 造形研究科工芸工業デザインコースガラス専攻 卒業

2013 / TOKYO DESIGNERS WEEK2013 ASIA AWARDS ヤングクリエイター展入賞 / 東京都

2014 / 個展「Nowhere」/ NANATASU GALLERY / 東京都

2014 / 個展「EMPTY」/ ギャラリー悠玄 / 東京都

2015 / Japan-Baltic Design week MADE IN JAPAN展示招待参加&講演 / リトアニア

2015 / 個展「夜とオオカミ」/ ギャラリー悠玄 / 東京都

2015 / The art fair +Plus-ultra 2015 スパイラル / 東京都

2016 / 第11回三井不動産商業マネジメントオフィス・エキスポジョン / 東京都

2016 / animalspirit / GalleryQ / 東京都

2017 / ガレリア青猫の8人の立体作家達展 / ガレリア青猫 / 東京都

2017 / けだものだもの展 / FEI ART MUSEUM YOKOHAMA / 神奈川県

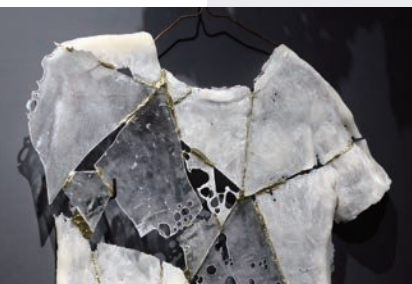
2017 / KOGEI ART FAIR KANAZAWA / 石川県

〈作品制作協力〉

岩井美沙、武藤麻衣子

Artist's Comment

新しい試みの作品にひたすら取り組む機会をいただけたこと、美術館での展示を経験することができ、最高の時間でした！設置の際には友人たちにも助けてもらい、ありがたい限りです。コロナ騒動の中、開幕に尽力してくださった関係者の方々とご来場いただいた方々には本当に感謝しかありません。一連の出来事すべてを含めて、改めて「アート」とはなんだろうと考える展示でした。



Title

無秩序の中の秩序

Order in disorder

Artist

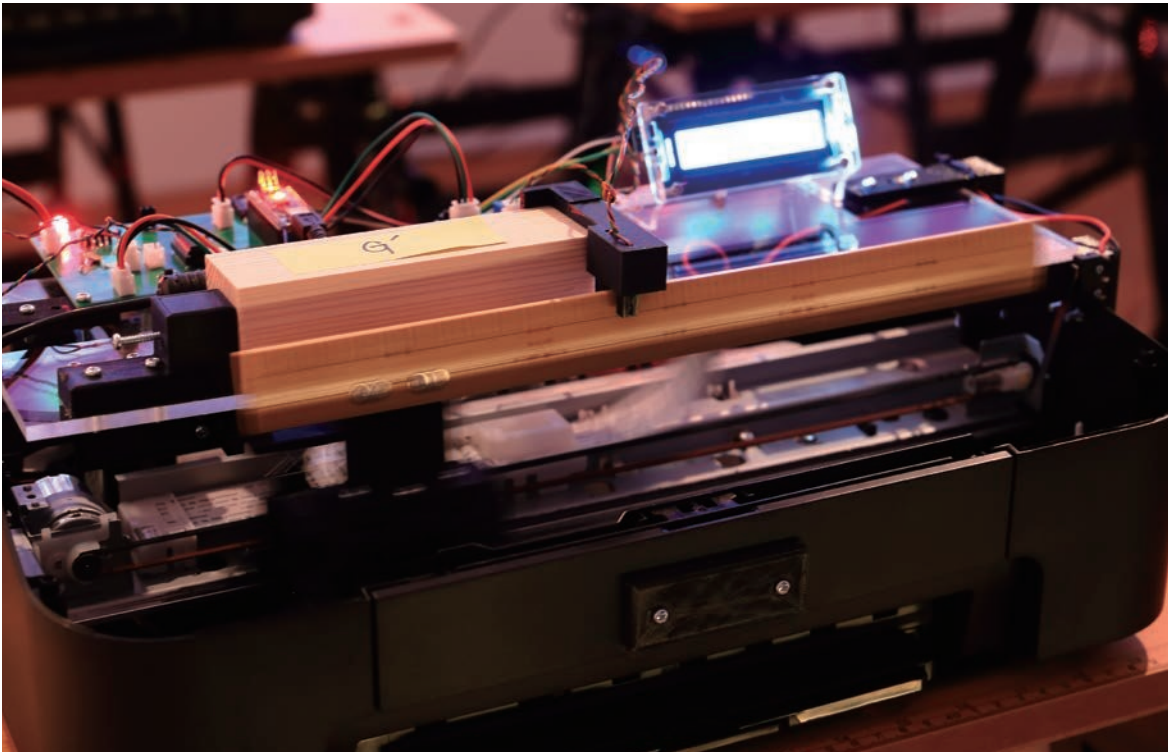
笠原 巧

KASAHARA Takumi



神話に登場する「ガンギエイ」の動きに基づき、複数台の測定機械がキューブ内で長さを測る。エイ特有の二項性と生体の持つ揺らぎが機械を通過し、「長さ」という秩序が空間に出現する。ヒトの古層に流れる神話と科学、未分離の記憶が「場」を介し生成する。

Inside the cube, numerous measurement instruments take measurements of the movement and distance of skates, ray fish appearing in mythology. The binomiality and physical wavering movement unique to rays are interpreted by the machines, and the order offered with “length” shows in the space. Memories which are inseparable from the myths and science creating the older layers of human history come alive within this “space”.





笠原 巧 KASAHARA Takumi

1993年岐阜県生まれ。岐阜県拠点。

Born in Gifu Prefecture in 1993 / Based in Gifu Prefecture.

2014 / 岐阜工業高等専門学校 電子制御工学科 卒業

2016 / 神戸大学 海事科学部 卒業

2019 / 神戸大学大学院 海事科学研究科 海事科学専攻 修了

〈作品制作協力(制作アドバイス)〉

安藤泰彦、小林孝浩



Artist's
Comment

初めての展示ということもあり、制作するうえで必要となる経験やてだてが私にないなか、多くの方々にサポートいただきました。AAICを通じて、制作を進める過程でこれまでの自身の工学的な技術の使いかた・使われかたを再考することができ、アートとの通底を感じられる貴重な機会となったことがとても嬉しいです。



遠藤利克 賞

Title

私たちの知らない犬

Our dog we don't know

Artist

川角 岳大

KAWASUMI Gakudai



犬の視点とともに滞在制作を行い、その目を重視した展示空間を作る。まっさらなものの見方の先に記憶のゆくえのあり方を考える作品。

I partook in an artist residency as I looked through the eyes of a dog and am making an exhibition space devoted to those perceptions.

This piece goes beyond new perceptions to examine the way memories exist.





川角 岳大 KAWASUMI Gakudai

1992年愛知県生まれ。埼玉県拠点。

Born in Aichi Prefecture in 1992 / Based in Saitama Prefecture.

2014 / 愛知県立芸術大学 美術学部美術科油画専攻 卒業

2015 / 絵画の何か / MAT nagoya / 愛知県

2017 / VOCA展2017 / 上野の森美術館 / 東京都

2017 / 「個展」ki → / florist-gallery N / 愛知県

2017 / 東京藝術大学大学院 美術研究科 修了

2018 / 「個展」タイミングの拍子 / fresh / 埼玉県

2019 / その先へ- beyond the reasons / komagome SOKO / 東京都

Artist's Comment



まず歩行を犬に合わせることから始めました。彼が何も知らないように、知らないまま歩く。もしかしたら全部知ってるのかもしれないと思う。その時々が絵の本体な気がして、どうしたらそれをキューブの中へ運び込めるんだろう…方法は分からないままでしたが、だんだんと「次の日があるだけでオッケー」なんだろうなと思うようになりました。

藤森照信 賞

Title

質量保存の法則 Law of conservation of mass

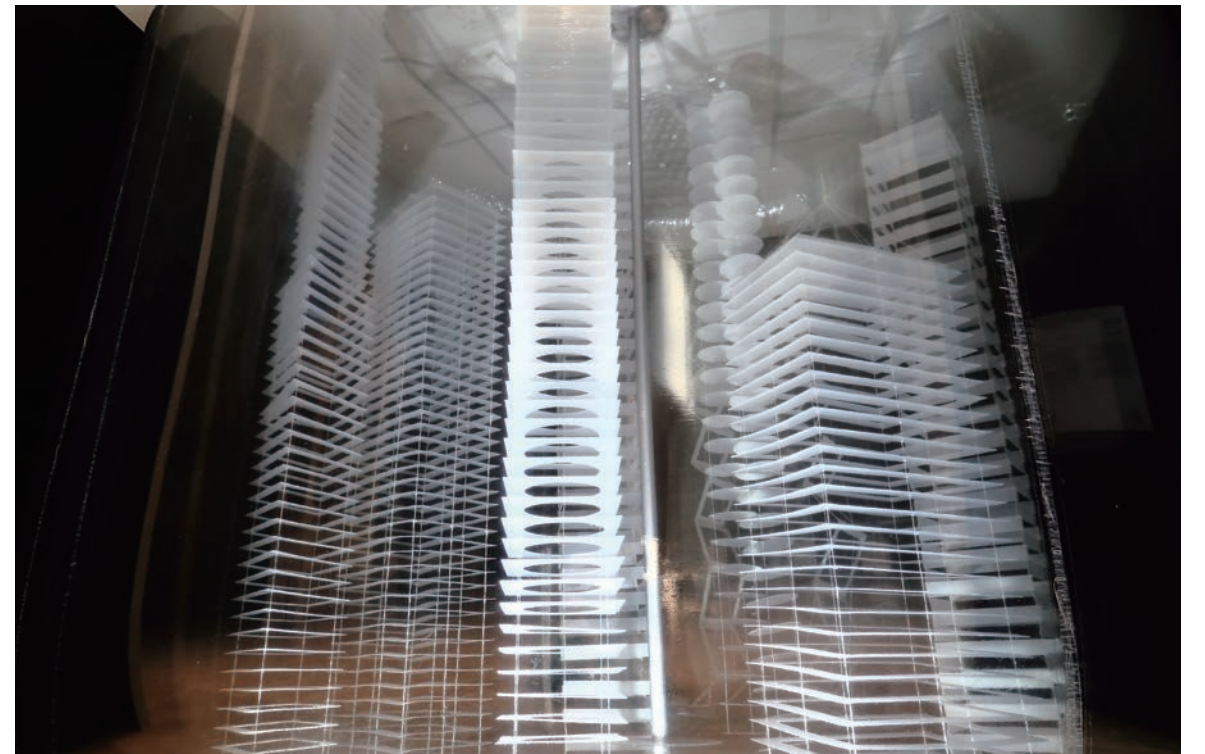
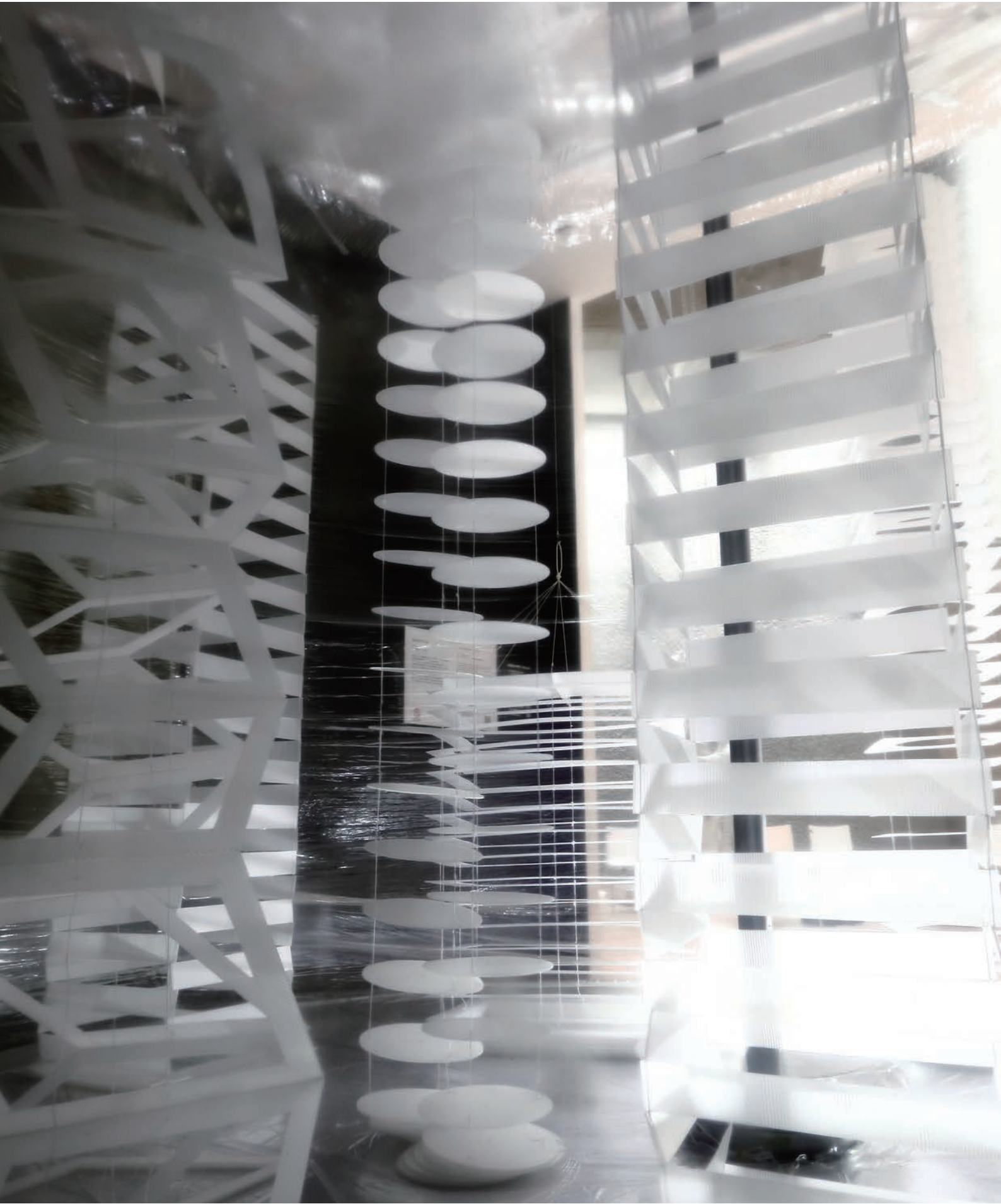
Artist

北川 純 KITAGAWA Jun



風船状のビニール袋を膨らませ、林と高層ビルという異なった2つの風景を出現させる。環境の質と量が一定に保ち続けられることを、質量保存の法則として表している作品。

Plastic bags inflated like balloons create two different scenes inside: one with a forest and one with skyscrapers. The piece illustrates the law of conservation of mass by continuously preserving the quality and quantity of the environments with a fixed constant inside.





北川 純 KITAGAWA Jun

1965年愛知県生まれ。神奈川県拠点。

Born in Aichi Prefecture in 1965 / Based in Kanagawa Prefecture.

2000 / Tシャツに風船を入れたことをきっかけに、風船インスタレーション作品として展開。

2003 / キリンアートアワード2003 奨励賞受賞 / 東京都・大阪府

2006 / 小田原市ストリートアートコンペ グランプリ受賞 / 神奈川県

2015 / 六甲ミーツアート 大賞準グランプリ受賞 / 兵庫県

現 在 / 風船が次第に巨大化していき、ビッグバルーンアーティストとして活動中。

Artist's
Comment



作品制作においてはとても細かい作業を伴うもので非常に困難を極めました。私のイメージ通りに仕上がり安心しました。作品主題の一つである「自然と文明の対比・同化」は鑑賞者の方にもわかりやすかったようですが、裏テーマとして設定していました「男と女とその間」のほうは伝わらなかったようです。作家としての力量の未熟さを痛感し、今後の創作活動に生かしていきたいと思います。



Title

Phantom container

Phantom container

Artist

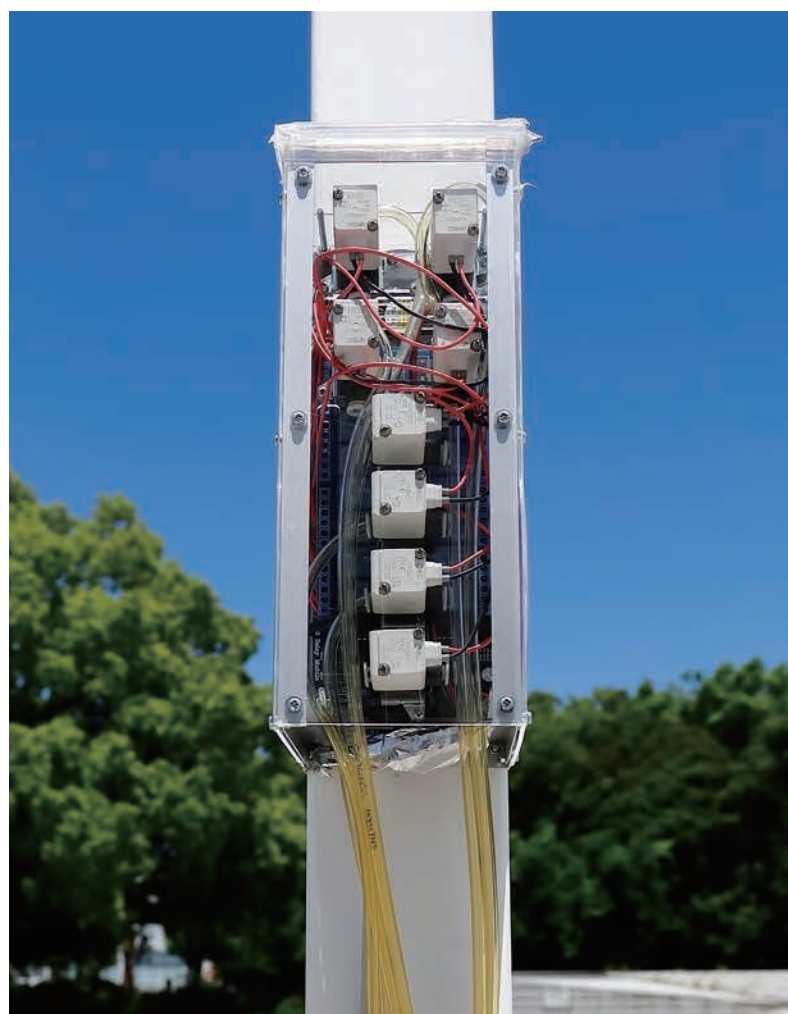
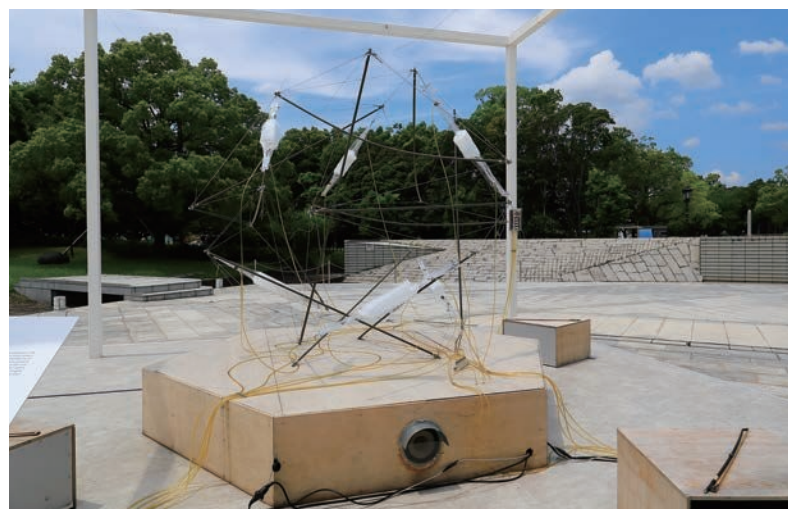
高橋 臨太郎

TAKAHASHI Rintaro



幻肢(失われた手足が今もあるという感覚)を持つ当事者の方の失われた身体のイメージをキューブの中に表現する。失われた身体の詳細が、生き生きと立ち上がってくる作品。

This piece illustrates the lost body part of someone with phantom limb (the sensation of a lost limb still existing) inside the cube. It brings back to life the memory of the body part which has been lost.





高橋 臨太郎 TAKAHASHI Rintaro

1991年東京都生まれ。東京都拠点。

Born in Tokyo in 1991 / Based in Tokyo.

2016 / Seaside Poolside / 稲毛海浜公園プール / 千葉県

2017 / 大地の靈性 / モデルルーム / 東京都

2018 / Social Concrete / WK Gallery / 東京都

2018 / そとのあそび展 / 市原湖畔美術館 / 千葉県

2019 / 「個展」スケールヒア / BLOCK HOUSE / 東京都

現 在 / 東京藝術大学大学院博士後期課程 在籍中

〈 作品制作協力 〉

今井 剛、岩田 和希、倉沢 奈津子、Mission ARM Japan (協力団体)



Artist's Comment

今回、幻肢という難題なテーマ、そして特別な状況下での展示ということで、自分のキャパシティを大きく超えた制作でした。様々な方々の協力なくしては完成することはありませんでした。ご協力してくださった皆様に改めて感謝いたします。



篠原資明 賞

Title

記憶の音 Sounds of Memory

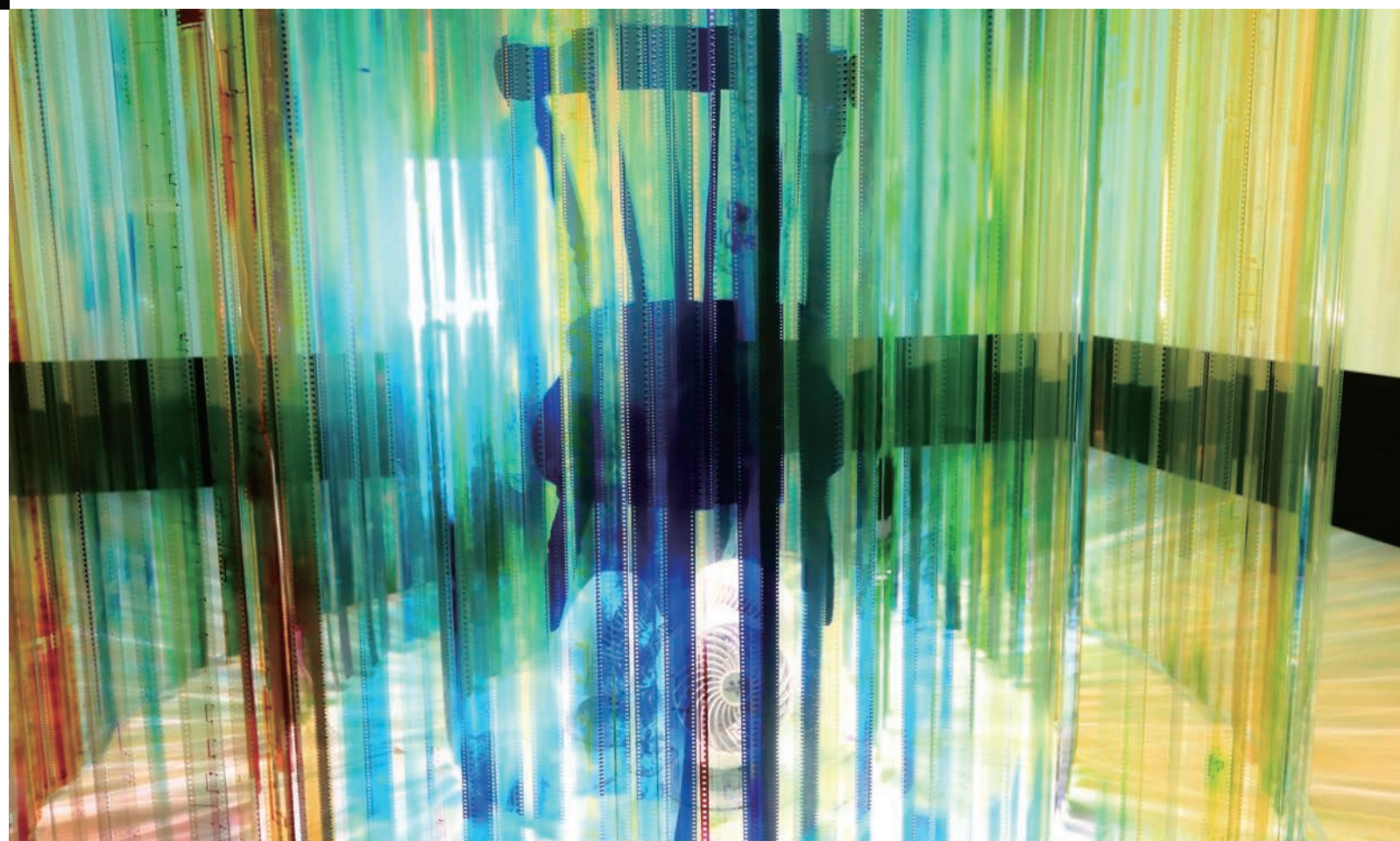
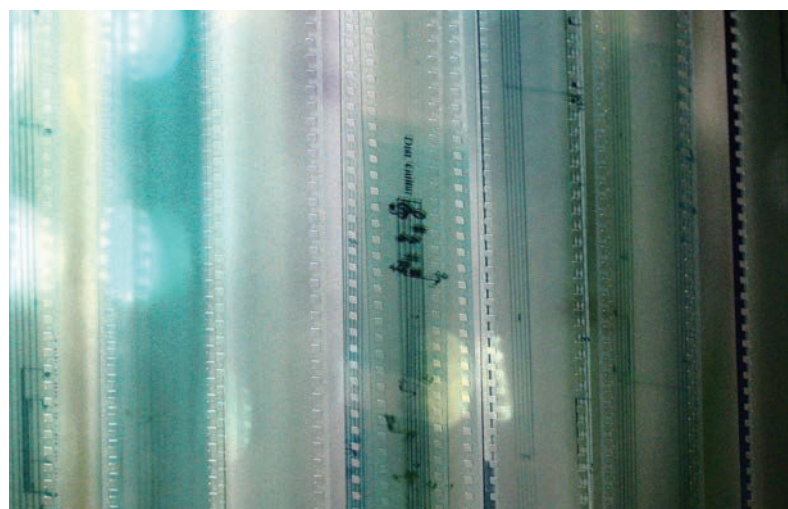
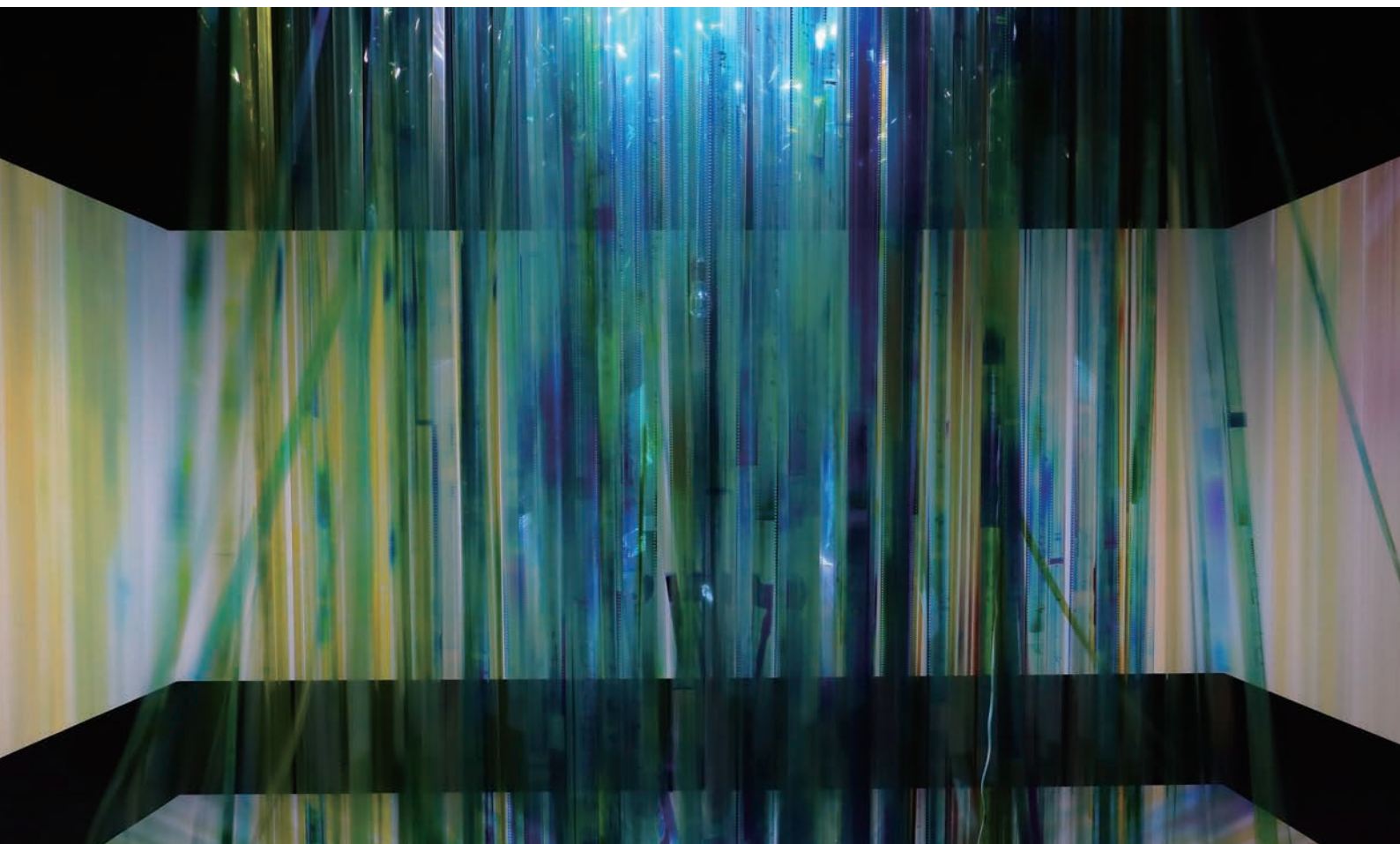
Artist

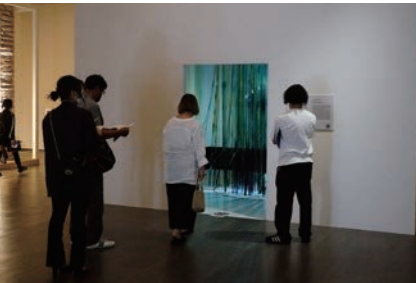
竹中 美幸 TAKENAKA Miyuki



日々の様々な音(主に時を告げる音)を音符にし、その譜面を焼き付けた映像用フィルムと光によるインスタレーション。音を可視化し、フィルムに焼き付けることで、過去の記憶を新たな物語とする作品。

This is an installation created from light and movie film showing a score of various everyday sounds (mainly indicating time) put down as musical notes. The piece makes sound visible, and by developing it on film, past memories become new stories.





竹中 美幸 TAKENAKA Miyuki

1976年岐阜県生まれ。東京都拠点。

Born in Gifu Prefecture in 1976 / Based in Tokyo.

1997 / 多摩美術大学 美術学部絵画学科油画専攻 入学

2003 / 多摩美術大学大学院 美術研究科絵画専攻 修了

2001 / ノキアアートアワードアジアパシフィック2000 / アジア第3位 / 韓国(表彰地)

2010 / トーキョーワンダーウォール ワンダーウォール賞受賞 / 東京都

2012 / シェル美術賞 島敦彦審査員奨励賞受賞 / 東京都

2018 / クインテットIV 五つ星の作家たち / 東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 / 東京都

2018 / 「個展」新たな物語 / アートフロントギャラリー / 東京都

現 在 / 余白のある絵画作品や、作品内に光と影を取り込むアクリル板と

透明樹脂を用いた作品、近年では映画のフィルムを感光・現像させた作品を発表。

2017年には壁面30mの作品を北京にて制作、設置。

〈作品制作協力〉

ArtTank

Artist's Comment

制作が佳境に入る頃、日に日に日本も世界もわたしたちの知らないところに向かってゆきました。完成後、開幕延期により美術館の中で静かに待つ作品を思い返すことしか出来ないもどかしい日々もありました。作品と自分の距離、作品をつくること、みてもらうということ、当たり前すぎた根底の部分を見つめ直す機会となり、この時期に制作、設営、展覧会会期が重なったことで様々な面において今後も忘れることのない貴重な経験となりました。

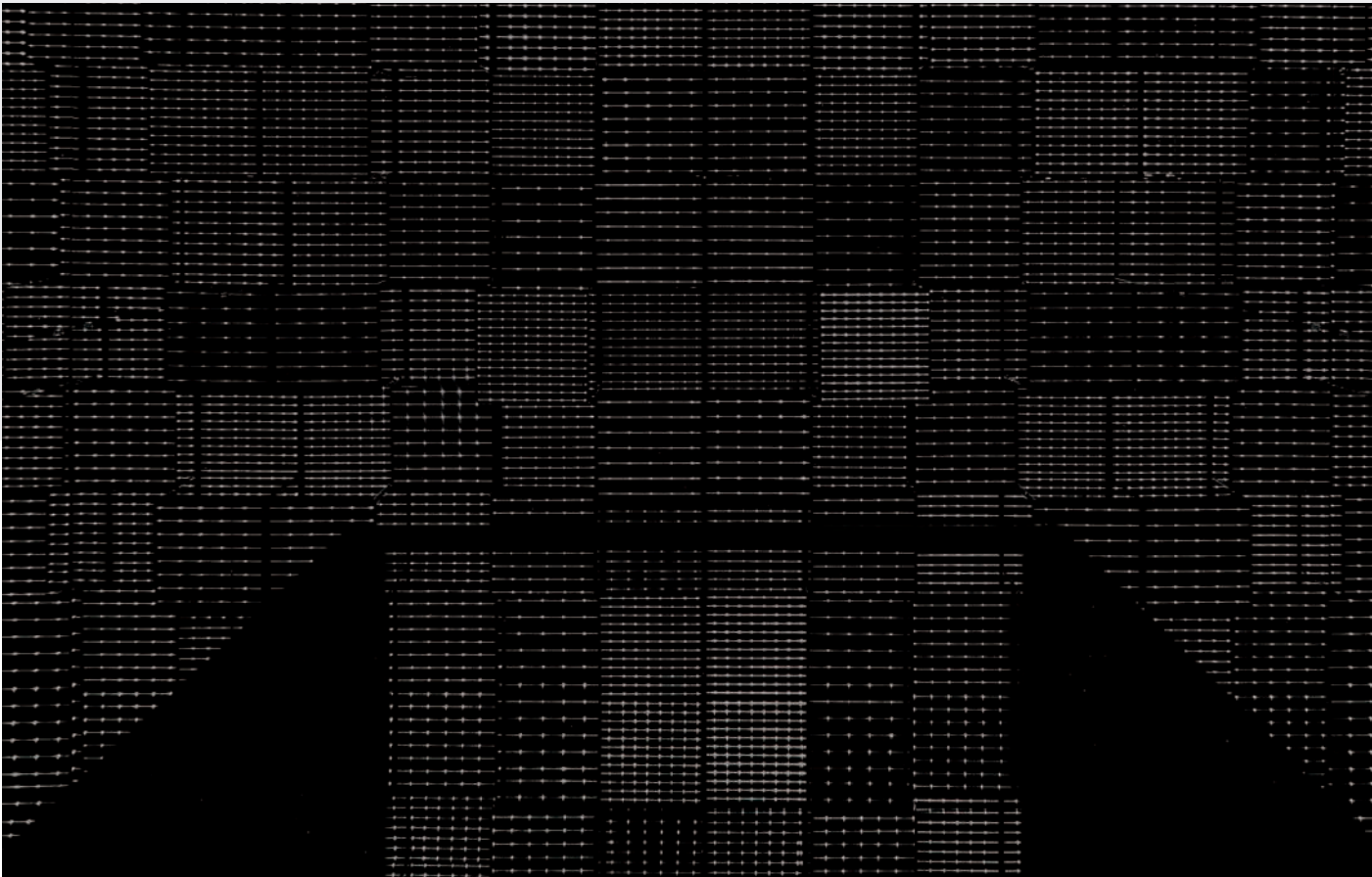


Title

cloud
cloud

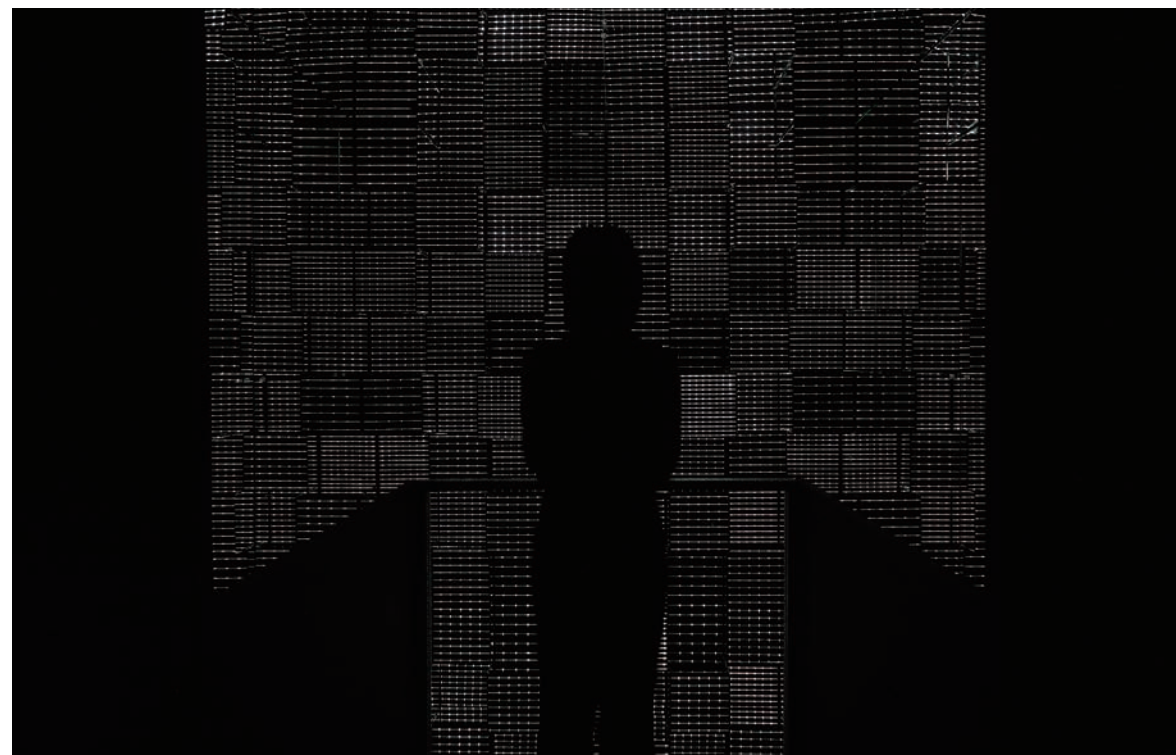
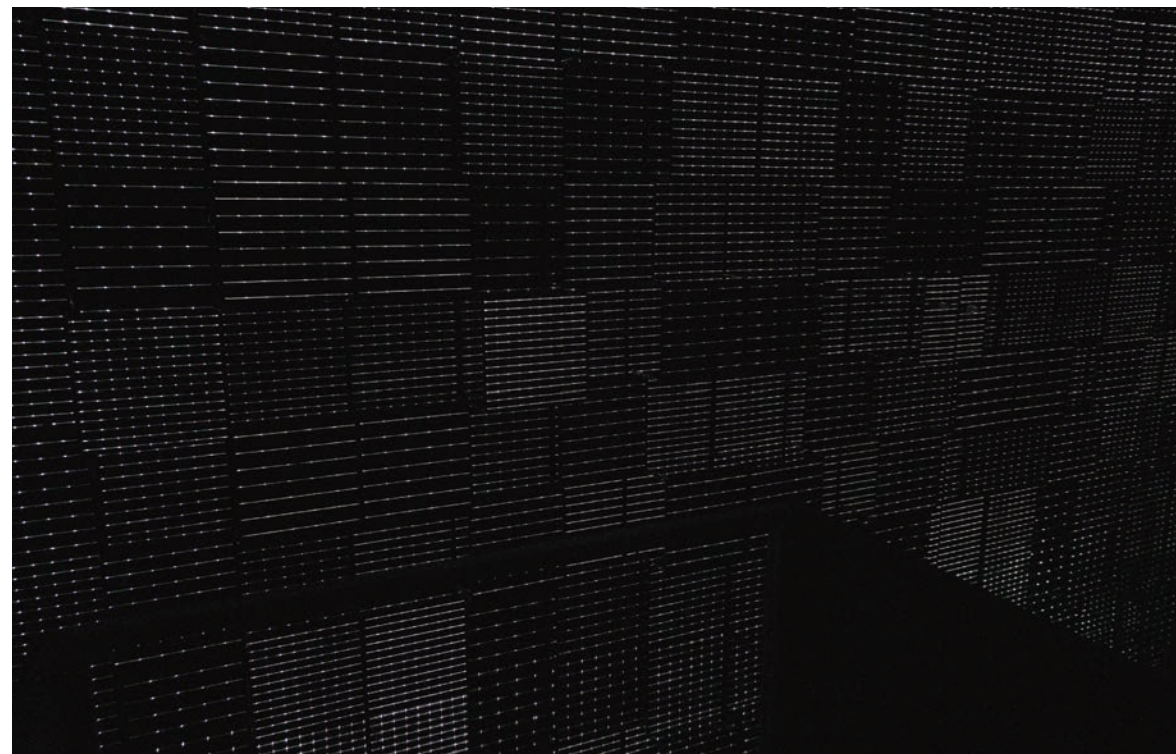
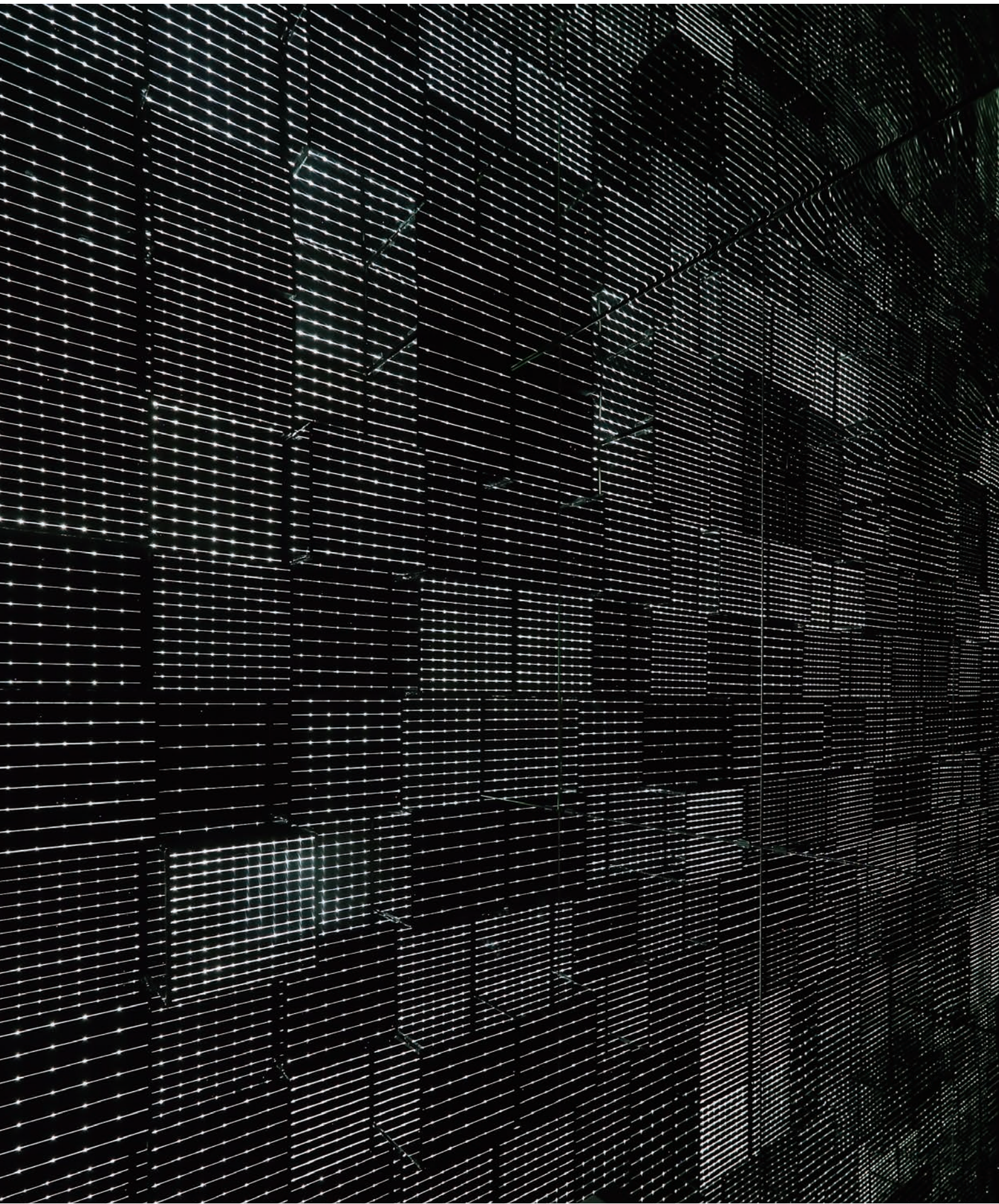
Artist

宙宙
chuchu



キューブ内部に箱状の作品を設置し、暗闇の中に距離感のつかめない光の点群が浮き上がる。知覚は揺さぶられ、宇宙空間に放り出されたかのような感覚は、鑑賞者を重力や大きさから解き放ち、私たちの奥底に眠る記憶を呼び起こす。

A box-shaped piece is installed in the cube with numerous specs of light floating in darkness, such that viewers cannot get a grasp of their distance. The viewer's perception is shaken as they sense they've been hurled into the cosmos, releasing them from gravity and size to awaken the sleeping memories deep within them.



宙宙 chuchu

2017年活動をスタート。京都府、愛知県拠点。

Formed in 2017 / Based in Aichi and Kyoto Prefecture.

2001 / アイスランド芸術大学 交換留学 / アイスランド

2003 / Winchester school of Arts、サウサンプトン大学 美術学部彫刻科 卒業 / イギリス

2017 / 宙宙活動開始

2018 / 「はじまりのはじまり」 / 浜松市鴨江アートセンター / 静岡県

2018 / 「第54回神奈川県美術展」奨励賞受賞 / 神奈川県

2019 / Co-program カテゴリーC「水になる」 / 京都芸術センター / 京都府

2020 / 「宙宙海中公園」 / 浜松市鴨江アートセンター / 静岡県

Artist's
Comment

大きな作品をつくるにあたり、技術的な相談をしながら制作ができ、展示などへの多くのサポートを頂けたのが有難かった。制作場所の提供や、そこから展開するワークショップなどの地域の方との交流があると、展覧会へと続く体験を共有でき、展示準備の協働へと繋がる流れが生まれるように思う。



Title

こちら、1001

This is 1001

Artist

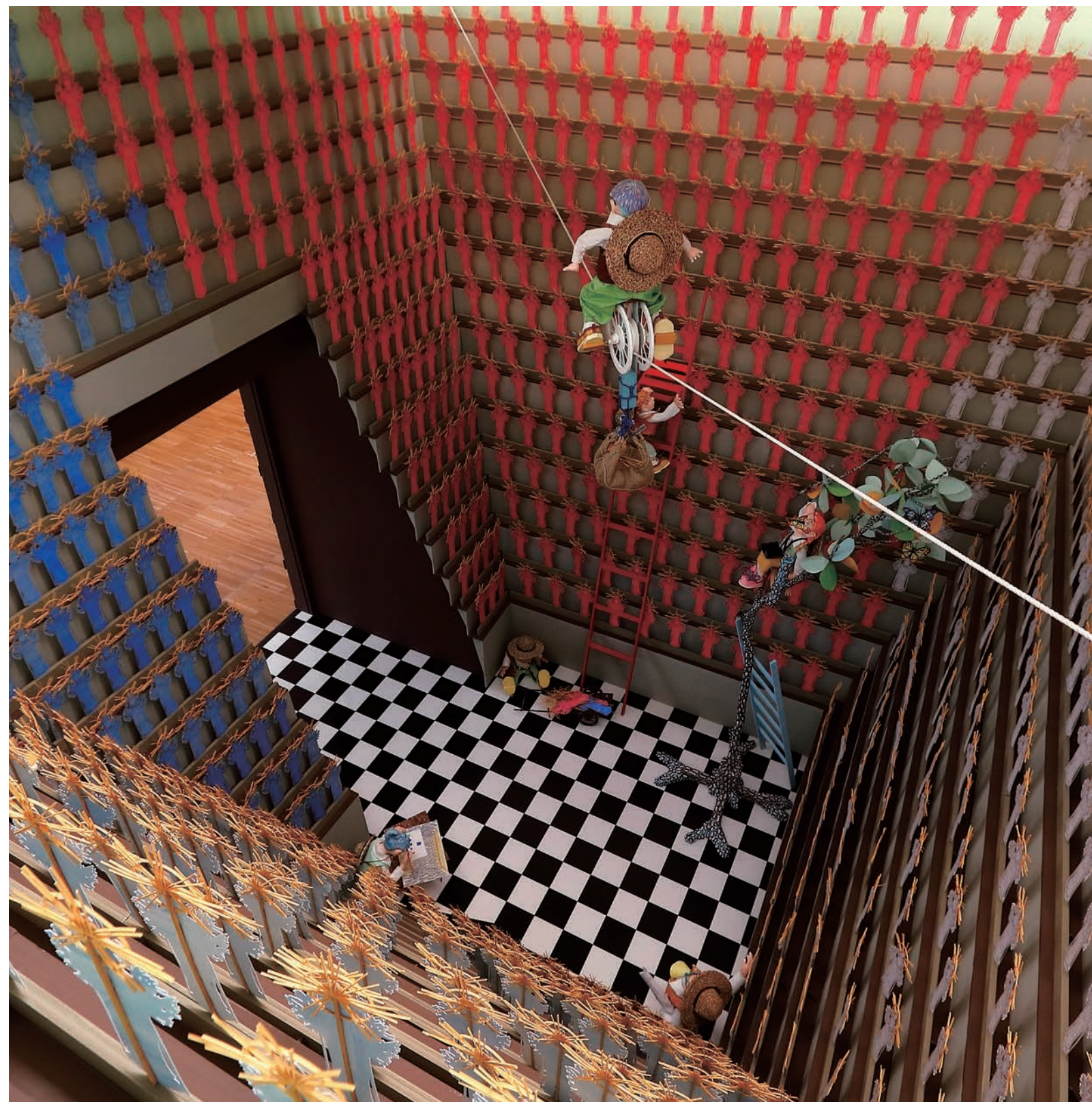
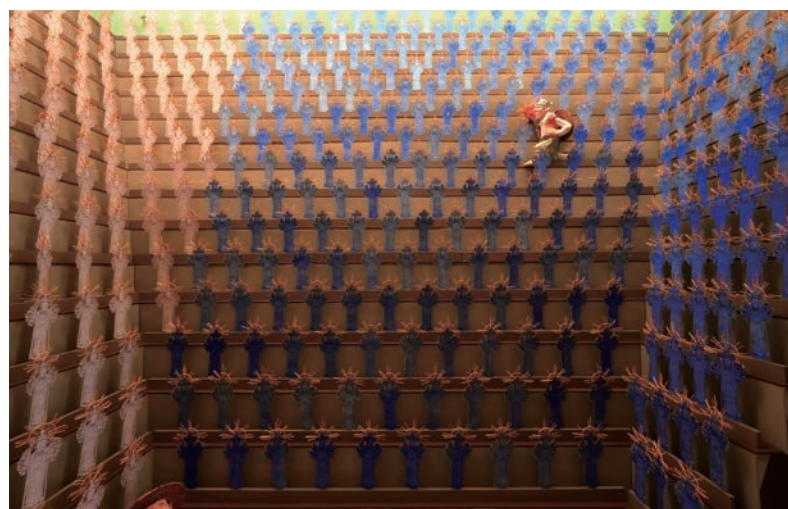
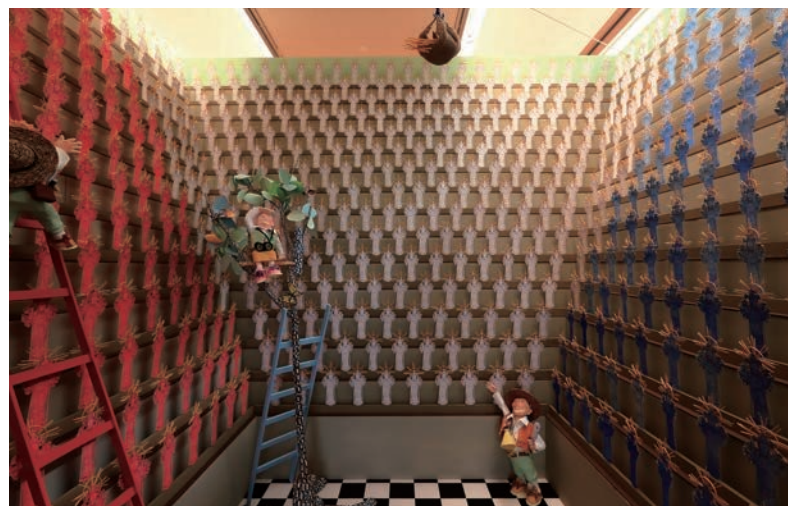
橋本 哲史

HASHIMOTO Satoshi



外面は、平安後期から「記憶」された一千一体黄土色仏の世界観。内面は、その「ゆくえ」となる一千一体仏像群を制作する現代版を表現。創作するのは、個性豊かなクリエイター達 が力を合わせ、外面の荘厳さとは対照的な世界を新たに作り上げる。

The outside of the cube portrays the 1,001 ochre-yellow Kannon statues as they have been “remembered since” the end of the Heian period. On the inside, you can see a modern-day version of those 1,001 statues to show “where those memories have ended up”. Highly individualistic artists join forces in this project and give a new perspective to the statues distinct from the majestic ones depicted on the outside.





橋本 哲史 HASHIMOTO Satoshi

1954年京都府生まれ。京都府拠点。

Born in Kyoto Prefecture in 1954 / Based in Kyoto Prefecture.

1981 / 京都市立芸術大学 美術学部油彩科 卒業
1987 / 「人形達」展 アイデア賞受賞 / 大阪府
1989～2003 / パンリアル展 / 京都市美術館 / 京都府
1992 / 日本海美術展 奨励賞受賞 / 富山県立近代美術館 / 富山県
1994 / 芸術祭典・京四条ストリートギャラリー94四条繁栄会理事長賞受賞 / 京都府
1995 / 日本海美術展 奨励賞受賞 / 富山県立近代美術館 / 富山県
1996 / 第3回人間賛歌大賞展 奨励賞受賞 / 北里研究所メディカルセンター / 埼玉県
第11回ユザワヤ創作大賞展 佳作賞受賞 / 東京交通会館 / 東京都
1998 / 第13回ユザワヤ創作大賞展 佳作賞 / 東京交通会館 / 東京都
2002 / 第5回人間賛歌大賞展 奨励賞受賞 / 玉森然記念館 / 埼玉県
2007 / 第6回人間賛歌大賞展 佳作賞受賞 / 玉森然記念館 / 埼玉県
2008 / 第7回西脇市サムホール大賞展 大賞受賞 / 西脇市岡之山美術館 / 兵庫県
2012 / 第9回西脇市サムホール大賞展 優秀賞受賞 / 西脇市岡之山美術館 / 兵庫県
2014 / 第10回西脇市サムホール大賞展 優秀賞受賞 / 西脇市岡之山美術館 / 兵庫県
2019 / Ge展参加

〈作品制作協力〉

画箋堂、彩雲堂、山田塗料商店、橋本幸枝、岩井博三、岩井恵子、秋山昭子、古田大、古田志保、橋本學、橋本麻友香、橋本幸優、古田崇、水沢保久、ボランティアの皆様

Artist's Comment



今季の新型コロナウイルス感染拡大防止対策のために、
どのようなのかと心配した展覧会でした。多くの展覧会
が中止になったにも関わらず、AAIC展は延期・延期の末に
漸く開催され、主催者・スタッフ・岐阜県美術館・ボランティア
のご努力とご対応には、感謝しかありません。苦労した搬入
作業から作品発表・搬出作業を終えて、一旦気持ちを小休止
してもいいのに、早々にAAIC展の新たな作品プランが生まれ
ました。尽きない発想と創作力を生み出す本展の魅力と
可能性をこれまで以上に強く感じています。

Title

Artifact 19-2

Artifact 19-2

Artist

平田 昌輝

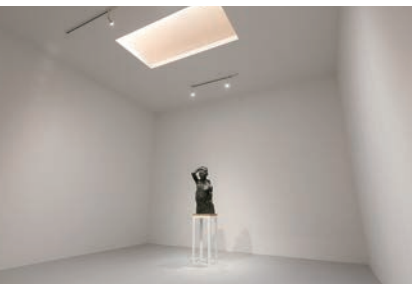
HIRATA Masaki



日本列島形成に伴ってできた三波川変成岩類と呼ばれる地質体の変成岩である緑色
片岩を彫刻し、裸体男性の半身像を象る。砥石で研ぎあげ、石の形成過程でできた文様
をあらわにする。消えても消えない、忘れても忘れられないものを現出させる試み。

This piece uses greenschist to carve a statue of the nude upper half of a male
body using metamorphic stone from the geological zone of the Sambagawa
metamorphic belt formed along the shape of the Japanese archipelago during
its creation. Polished with a whetstone, the piece reveals the pattern given to the
stone in its formation. This project is an attempt to show what disappears, yet
remains; what is forgotten, yet unforgettable.





平田 昌輝 HIRATA Masaki

1981年富山県生まれ。富山県拠点。

Born in Toyama Prefecture in 1981 / Based in Toyama Prefecture.

2007 / 東京藝術大学大学院 美術研究科 修了

2009 / 身近な川や山の石での制作を開始

2013～ / 富山大学 芸術文化学部 講師

2014～2017 / 同大学の大藤茂教授(地質学)協力のもと、全国各地の変成岩を中心に石の調査を実施

2015 / 原始感覚美術祭2015 / 長野県

2017 / 「個展」彫刻における石の回廊、未踏の / ギャラリーなつか / 東京都

2018 / 第14回大分アジア彫刻展 / 朝倉文夫記念文化ホール / 大分県

2018 / 「個展」 / ギャラリーなつか / 東京都

2019 / 「個展」Artifacts / ギャラリー無量 / 富山県



Artist's
Comment

コロナ禍の難しい状況の中でご尽力いただいた関係の方々に心から感謝申し上げます。この状況の中、この展覧会で、また岐阜県美術館のキューブの中で、自身 の作品とじっくり対峙できたことはまさに得難い経験でした。多くの反省と気づきを今後に繋げます。



Title

SOMETHING GREAT ～記憶の風景～

SOMETHING GREAT ～Scene of Memory～

Artist

御宿 至

MISHIKU Itaru



現代社会を象徴し、世界の物流現場で無数に使用されているパレット（荷台）を用い、脳内にある“記憶の貯蔵庫”には、それ以上の数の「記憶が収められた引き出し」があることを喚起し、僕たちの身体にある壮大な宇宙の神秘を表現する。

This project uses the innumerable pallets used at the world's logistics sites—symbols of our modern society—to depict the even more numerous “drawers of memories” from the “storehouses of memories” in our brain and depicts the mystery of the expansive space within our bodies.





御宿 至 MISHIKU Itaru

1949年静岡県生まれ。静岡県、イタリア拠点。

Born in Shizuoka Prefecture in 1949 / Based in Shizuoka Prefecture and Italy.

1977 / イタリア国立ローマ美術アカデミー彫刻科(エミリオ・グレコ教室) 卒業
 1992 / 日本・イタリア新世代展 / イタリア国立ローマ近代美術館・ローマ日本文化会館 / イタリア
 2001 / 彫刻によるヨーロッパでの出会い展 / モントーバン文化センター / フランス
 2004 / 「個展」再生 / ローマ大学所属現代美術実験美術館 / イタリア
 2005 / 「個展」結界 / スポレート現代美術館 / イタリア
 2007 / 日本通運(株)創立70周年記念事業モニュメント
 「安全の誓い」制作コンクール 大賞受賞 / 東京都
 2018 / 「個展」風儀(てぶり) / オリエアートギャラリー / 東京
 2019 / めぐるりアート静岡2019+(Something Great～記憶の風景～) /
 主催 静岡県文化財団 / グランシップ / 静岡
 2019 / めぐるりアート静岡2019(Tops - 場) /
 主催 静岡市文化財団、文化庁 / 東静岡アート&スポーツヒロバ / 静岡
 2020 / 第16回KAJIMA彫刻コンクール作品展 / 鹿島KIビル / 東京
 現 在 / ローマ市(イタリア)と富士宮市を拠点に創作活動が続ける。

〈作品制作協力〉

アヘッドプロ、遠藤電気管理事務所、株式会社 SET UP、工房自遊人、スター精密株式会社、
 丸甲南部木材株式会社(企業6社)、
 岩崎和由、加藤利忠、近藤正寛、佐野友之、白井正幸、中村光志(個人6名)

Artist's Comment

未曾有のコロナ禍での開催となり、他の入選作家の人たちとの接点が希薄だったのが残念でした。しかし、岐阜県の現代美術に取り組む一端に触れることが出来、貴重な体験でした。こうした試みが、他県の文化行政のモデルの一つとなることを願うと同時に、アートを通して世界の人々と繋がることの素晴らしさの動機付けとして花開くことを祈ります。



高嶺格 賞

Title

そして、「宇宙の子」は、自ら造った
「灰かに酔っているAI」と対決する。

And “The children of the universe” shall confront
the “Slightly drunk AI” that they created.

Artist

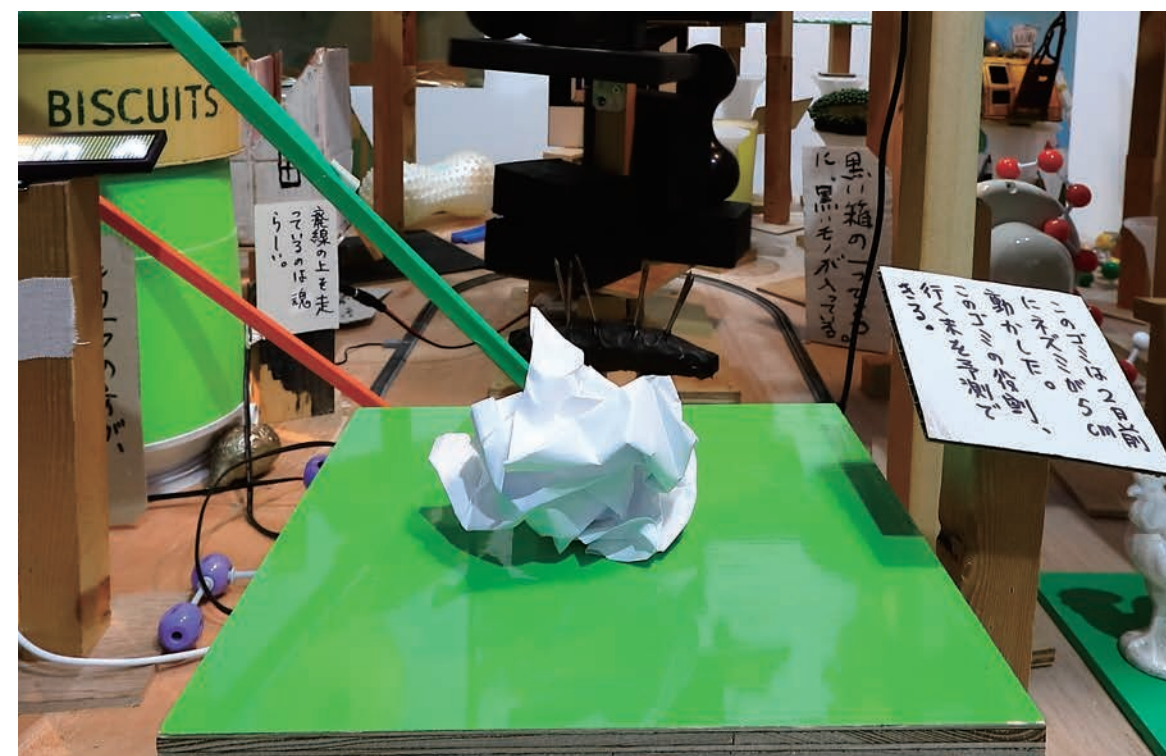
森本 孝

MORIMOTO Takashi



宇宙の記憶を持つ粒子から成る人。今や人が造ったAIが、核以上に人を支配し、別の記憶主体になろうとしている。いずれ、究極の灰かに酔ったAIが人と対決する。が、あなたも私も、死により突然、個人の記憶と共に消え、無意味な無存在となる。(その物語。)

Humanity exists due to the memory held by the particles of space. At present, the AI which humanity has created is working to control him to a degree stronger than that of nuclear weaponry and become the new holder of memory. Eventually, an extreme, though slightly drunk AI will stand against humanity. However, through death, both you and I will naturally disappear with our personal memories, fading into a meaningless nonexistence. (This is the story of the piece.)





森本 孝 MORIMOTO Takashi

1946年岡山県生まれ。神奈川県拠点。

Born in Okayama Prefecture in 1946 / Based in Kanagawa Prefecture.

1968 / 京都大学法学部 卒業

2006 / 自動車会社などで就労後、定年退職

2011 / 横浜のBankArt講座「靴箱から広がる宇宙-宇宙はメカニズムで充ちる。かな?」に参加。
その時点(65歳)より制作を開始。

2011 / アーツ千代田3331ボコラートvol2 椿昇賞受賞 / 東京都

2012 / アーツ千代田3331ボコラート入賞者展 / 東京都

2013 / 横浜BankArt スタジオに参加、制作、展示 / 神奈川県

2016 / 第19回岡本太郎現代芸術賞 入選 / 岡本太郎美術館 / 神奈川県

2013~2018 / 日本アンデパンダン展 / 新国立美術館 / 東京都



Artist's
Comment



「とにかく、コロナ禍の中、一般公開できたのは、立派でした。[ぼくにも心からの安堵と感謝と喜びがあります。ただ、コロナで仕方ない事です、一般のお客さんがぼくの作品にどんな反応をするのか、は全く見えませんでした。なんでも良いから、おもしろい、全くわからない、楽しい、など、何らかの心的刺激を残せたら幸いです(が、それがわからないのが残念、わかる仕掛けが欲しかった)。もう一つ、今後の事を考えるとAAICと言う名前が弱いと感じます、人に覚えてもらうための強い名前が必要。日本と世界に向けて、「ぎふ+Cube」を中核に再考を望みたい。」



Title

beclouded, becalmed, belighted

beclouded, becalmed, belighted

Artist

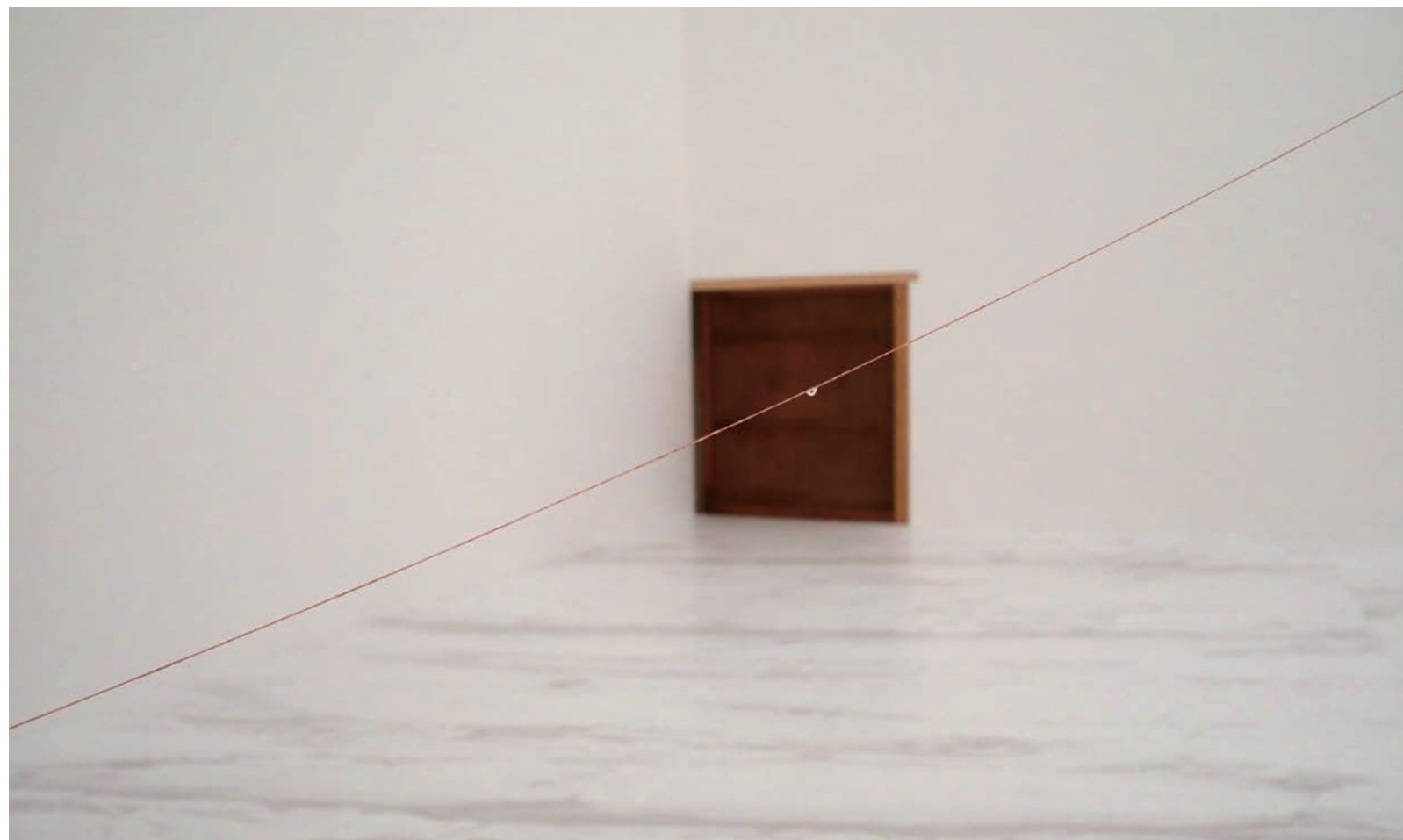
保良 雄

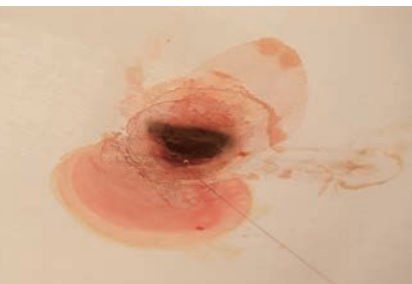
YASURA Takeshi



色は単なる物理現象や知覚現象ではなく、太古より人々が祈りを自然の理に捧げること
で汲み出された。天井から吊るされた糸を伝い、かつて国旗にも使われた日本茜から抽出
した液体は空気に漂う。自然の営みは空間のなかで機械の律動と交わりどこに接続され
てゆくだろうか。

Color isn't just a physical or sensory phenomenon, but something that was
offered as a prayer to the natural laws by peoples in times going back to
antiquity. Strings hanging down from the ceiling are soaked with liquid extract
from Japanese madder, once used in the national flag of Japan, as it drifts
through the air. The workings of nature interact with the rhythm of machines in
the space, connecting with one another to which point no one can say.





保良 雄 YASURA Takeshi

1984年滋賀県生まれ。フランス、東京都拠点。

Born in Shiga Prefecture in 1984 / Based in France and Tokyo.

2007 / 大阪芸術大学芸術学部工芸学科金属工芸コース卒業

2018 / 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

2018 / École nationale supérieure des beaux-arts de Paris 在学

2018 / END OF SUMMER / アメリカ

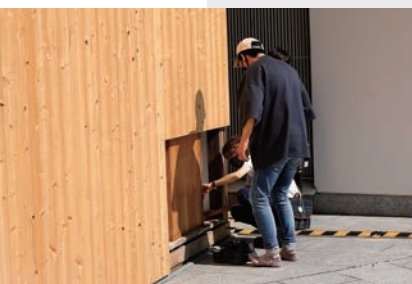
2019 / Espace de Réflexion—ジャン＝リュック・ヴィルムートが伝えつづけた愛と学び— / 東京都

2020 / Jeune Création69 / フランス

2020 / 65e Salon de Montrouge / フランス

〈 作品制作協力 〉

矢橋大理石株式会社(協賛企業)、かさや儀平 杉本 一郎、今井 さつき、ウチダ リナ、大塚 諒平、川田 諒一、角田 里沙、中峰 渉、夏堀 陽一、古谷 由布



Title

石斧をモチーフにした石斧の彫刻

Stone axe sculpture with stone axe motif

Artist

山本麻璃絵 + 姫野亜也

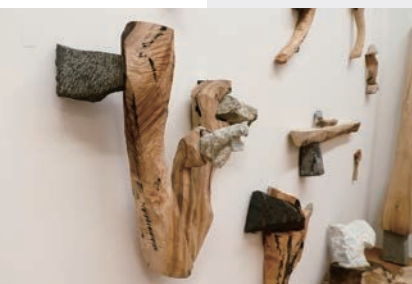
YAMAMOTO Marie + HIMENO Aya



一人の作家が石斧の石の頭の部分を石彫で制作し、もう一人の作家が石斧の柄の部分を木彫で制作して、据える。国境も言語もない頃から存在している石斧をモチーフにかたちづくことで、人の根源的なつくる欲求を示す作品。

One of us carves the stone axe's head from stone while the other carves the handle from wood, and then the two are put together. These pieces show, with the motif of a stone axe, the fundamental desire of man to create that has existed since the time before borders or language.





山本麻璃絵 + 姫野亜也 YAMAMOTO Marie + HIMENO Aya

山本 / 1988年東京都生まれ。東京都拠点。

姫野 / 1990年大分県生まれ。東京都拠点。

YAMAMOTO: Born in Tokyo in 1988 / Based in Tokyo.

HIMENO: Born in Oita Prefecture in 1990 / Based in Tokyo.

〈山本〉

2010 / 武蔵野美術大学 造形学部彫刻学科 卒業

2011 / 第14回岡本太郎現代芸術賞 特別賞受賞 / 神奈川県

2012 / 武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻彫刻コース 修了

2015 / 「個展」ものごころ展 / ふなばしアンデルセン公園子ども美術館 / 千葉県

2016 / 「個展」彫刻と家と外 / gallery blanka / 愛知県

2017 / あなたが感じていることと、わたしが感じていることは、ちがうかもしれない / はじまりの美術館 / 福島県

2018 / 「個展」wood shot / キヤノンデジタルハウス銀座 / 東京都

〈姫野〉

2012 / 武蔵野美術大学 造形学部彫刻学科 卒業

2013 / 「個展」隠沼 / いりや画廊 / 東京都

2013 / 第62回神宮式年遷宮奉賛 依代アートプロジェクト / 岩清水八幡宮 / 京都府

2014 / 武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻彫刻コース 修了

2015 / 「個展」姫野亜也 / いりや画廊 / 東京都

Artist's Comment

ジャンル不問の無差別級の公募、ともすれば殴り合いの乱闘になりそうなものだけれども、それをこの公募の特徴であるキューブが制してくれていたように思う。

制作期間が長く設けられ、長い時間キューブの事を考えてきたけれども、搬入・設営で実際に相對すると悪戦苦闘四苦八苦だった。現実のその場で自分が体感し反応すること、オンラインでは代替できないものやことを、強く強く感じる機会だった。



村瀬恭子 賞

Title

Repeat

Repeat

Artist

Yuni Hong Charpe

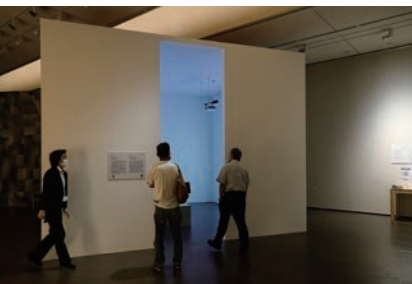
ユニ ホン シャープ



フランス語による親子の会話の映像と、朝鮮舞踊の断片的な動作を相互にやり取りするダンサーたちの映像を投影する。在日コリアンとして日本に生まれ、現在フランスで暮らす作家自身の記憶のゆくえを追う作品。

The piece projects a video of a mother and child's conversation in French and videos of dancers performing fragmented pieces of a Korean dance. It chases after the path of my memories, going from being born Korean Japanese to my current life in France.





Yuni Hong Charpe ユニ ホン シャープ

1981年東京都生まれ。フランス拠点。

Born in Tokyo in 1981 / Based in France.

2015 / パリ＝セルジー国立高等芸術院 卒業

2015 / Mulhouse 015 ミュールズ国際青年ビエンナーレ グランプリ受賞 / フランス

2017 / ゲンビどこでも企画応募 島敦彦賞受賞 / 広島現代美術館 / 広島県

2019 / Festival 100% / Parc de la Villette / フランス

2020 / CND(フランス国立ダンスセンター)にて滞在制作 / フランス

現 在 / パフォーマンスを中心とし、主にフランスで制作

〈 作品制作協力 〉

ダンス: ジェシカ・ゲズ、ゴレスタン・ウティ、アントワン・ヴァレ

子供: メイ

カメラ: シリル・シャルボンティエ

制作協力: ユン・ミュ

技術協力: 宮路 雅行

字幕翻訳協力: 西田 杏祐子

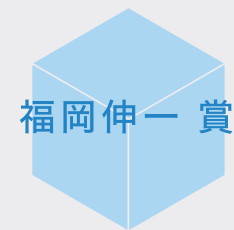
機材協力: ARTISTS' GUILD

スタジオ助成: CND Centre national de la danse, accueil en résidence.



Artist's Comment

搬入前に飛行機が飛ばなくなりどうなることかと思いましたが、予期しない様々な変更点にも柔軟かつ丁寧に対応して頂き、とても感謝しております。また、村瀬恭子審査員賞までいただくことができて、大変光栄です。今回と前回を通じ、ただ一人の女性審査員でいらっしゃる村瀬さん。その意味でも大変ありがたい受賞だと思っています。



Title

Light NOW—イマココ

Light NOW—Right NOW

Artist

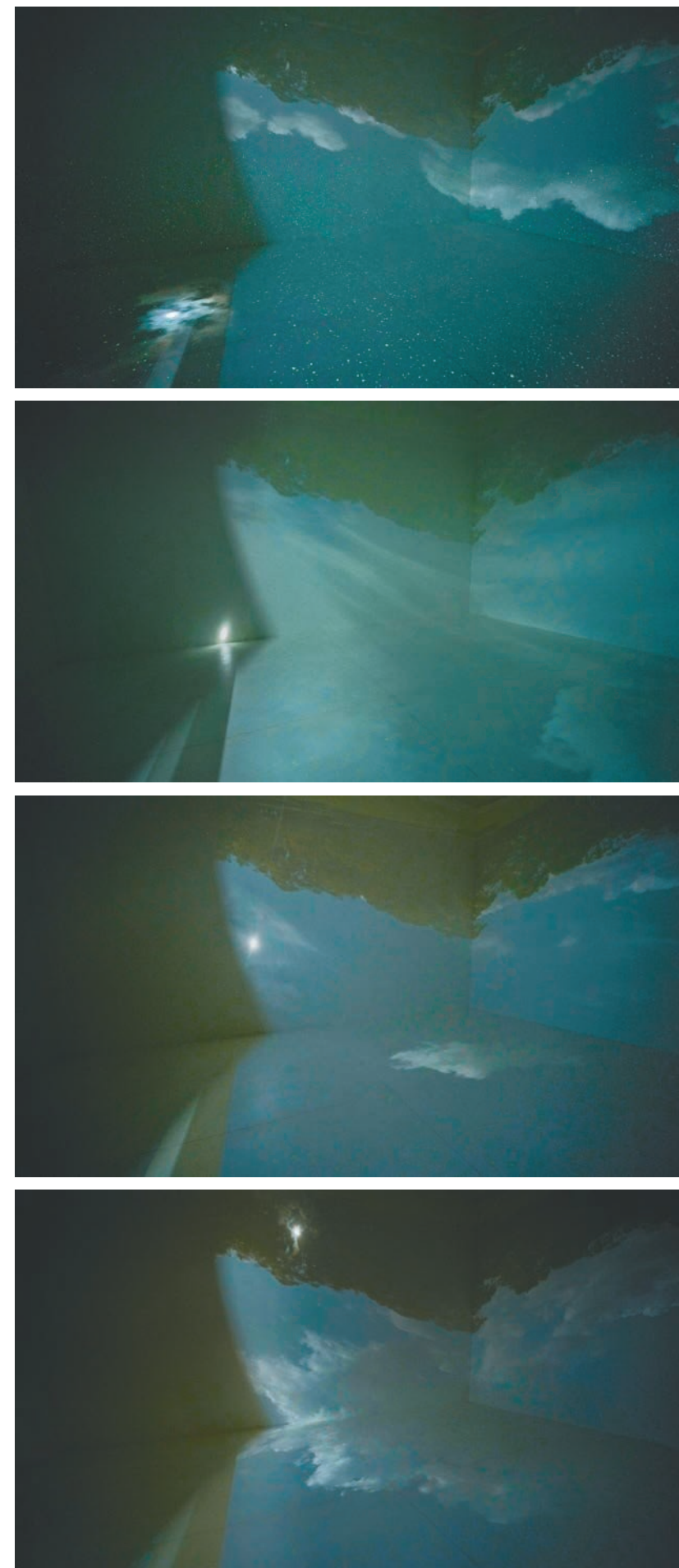
W.N.project

ワンニャー プロジェクト / 小島 久弥・江藤 苺夏



天井と壁の2か所に穴を持つカメラ・オブスキュラ(暗室)を制作。内部に映り込む外の風景や空、太陽光の軌跡で、時間を可視化する。時間を可視化し「イマココ」を見つめることで、「記憶のゆくえ」を探る作品。

This piece consists of a camera obscura (dark room) with two holes: One in the ceiling and one in a wall. The outside scenery and sky are reflected on the inside, and the path of the sun's rays make time visible. With time able to be seen, this piece lets us see “right now” and search for the answer as to “where our memories go”.





W.N.project ワンニャープロジェクト / 小島 久弥・江藤 苺夏

2014年結成。愛知県拠点。

Formed in 2014 / Based in Aichi Prefecture.

2003 / 小島久弥、江藤苺夏 協同制作を開始

2005 / L gallery 開設

2014 / 小島久弥と江藤苺夏によるユニットを「W.N.project」と命名

2014 / 夏休み子どものプログラム2014 あっち?こっち?どっち? / 豊田市美術館 / 愛知県

2016 / 土の冒険のぼうけん MAGICAL MIRACLE CERAMIC / 岐阜県現代陶芸美術館 / 岐阜県

2017 / 時空散歩一見えないはずの光景を / 岡崎シビコ / 愛知県

2018 / Critical Point - True Colors of The Ghost - お化けの正体 /

特定非営利活動法人CAS / 大阪府

2019 / あいちトリエンナーレ地域展開事業

「Windshield Time わたしのフロントガラスから」現代美術 in 豊田 / 喜楽亭 / 愛知県

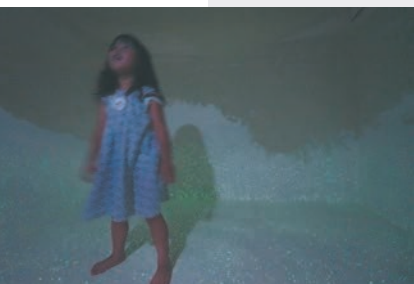
〈作品制作協力〉

岩崎台・香久山福祉会館、ADCアート、小林大地、株式会社スタジオブルミエ、高柳有沙、船越浩海、株式会社マサシックス、ミラクルファクトリー（青木一将、小柴一浩、児玉佑司、松本崇宏）、小島章嗣



Artist's Comment

このような時世で開催できたことは、奇跡的であったと思う。開催時期がずれたことで、作品の有り様に多くの支障が出てしまったことは仕方なかったであろう。「キューブであること」「記憶のゆくえ」というテーマに興味を持ち応募したが、キューブである意味の感じられる作品が少なく、その点は残念に思った。

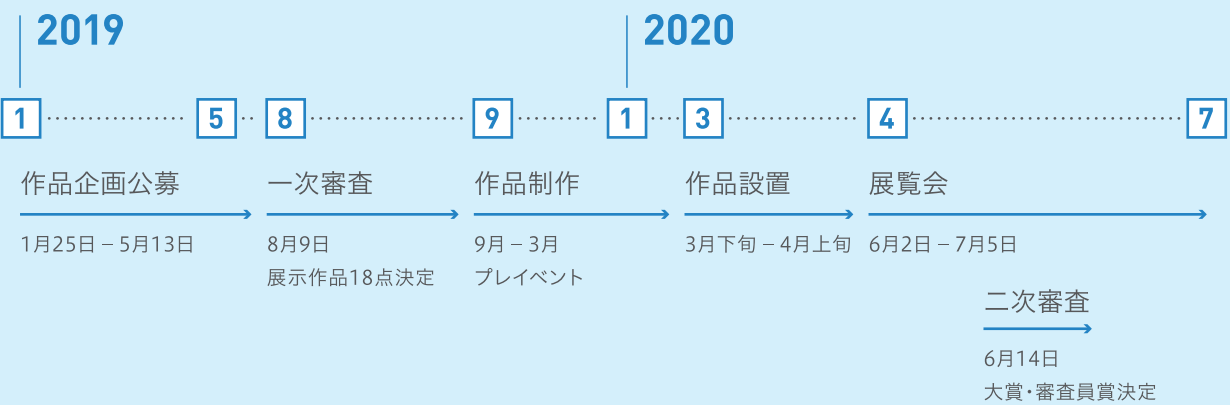


Chapter

2

Document
記録

募集から審査までの記録



募集規定

1. 募集期間

2019年1月25日(金)～5月13日(月)
2. テーマ:「記憶のゆくえ」

約37兆個の細胞からなるとも言われる私たちの身体。そのすべての細胞の中には、遠い生命の起源から受け継がれてきた膨大な遺伝子情報(記憶)が組み込まれています。そして私たちは今も、人類の歴史や文化という「記憶」をたよりに日々この世界を理解し、判断し、生活しています。災害の記憶、戦争の記憶、あるいは、「わたし」自身の生い立ち。私たちに刻み込まれた記憶とは何なのでしょうか。記憶とはいつか忘れ去られてしまう「思い出」のこたなののでしょうか。自動車の運転から顔の認証まで、人工知能(AI)によって機械がこの世界のあらゆる事物を「覚え」はじめた現在、私たちは記憶に着目し、その意味を見つめなおしてみたいと考えています。丈六(*1)のキューブの空間から発せられる、まだ見ぬ未来に向けたメッセージを「Art Award IN THE CUBE 2020」は待っています。
3. 応募資格

Art Award IN THE CUBE 2020の趣旨を理解し、選考された場合には作品の完成まで責任を持って取り組める方(個人、グループ、年齢、国籍を問いません)
4. 作品規定等

作品は、未発表のものに限ります。1名・1グループにつき1作品まで。
5. 作品寸法等

4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)のキューブ空間内で展示できること
6. 審査料

1点につき5,000円(税込)
7. 賞・賞金

大賞 賞金 500万円 / 1点
審査員賞 賞金 100万円
入選 賞金 50万円 / 18作品(作品制作時に支給)

*1:丈六
ブツタの身長が1丈6尺であったといわれることから丈六仏が作られるようになりました。本展では第1回のテーマ「身体のゆくえ」に触発され、キューブの寸法を丈六と決めました。

CLOSS TALK

審査員・前回入選作家をゲストに、東京・岐阜・名古屋・福岡・京都でトークイベント／公募説明会を開催。1月からの公募開始をPRし、機運を盛り上げた。各会場とも、作品制作への想いやAAICの取り組み等について生の声を聞ける貴重な機会となった。

in 東京



2019年1月13日 会場:3331Arts Chiyoda, 参加者:約80名
ゲストメンバー:
桑原鑽司(AAIC企画委員長)、日比野克彦、三輪眞弘(AAIC企画委員)、
ミルク倉庫+ココナッツ(AAIC2017大賞受賞)、安野太郎(AAIC2017高橋源一郎賞受賞)

企画委員・前回入選作家それぞれの立場からトークを展開。キューブという独自性、支援体制への評価、展覧会後の広がりについて語られ、審査の模様や制作風景、展覧会や各種ワークショップの模様が画像で紹介された。

in 岐阜



2019年1月26日 会場:岐阜県図書館, 参加者:約60名
ゲストメンバー:
第1部 高嶺格(AAIC2020審査員)、桑原鑽司(AAIC企画委員長)、衣笠文彦(AAIC企画委員)
第2部 安野太郎、松本和子(AAIC2017入選)

第1部では衣笠さんが「自分も応募したい」と語り会場を盛り上げ、高嶺さんは自身の作品を紹介し作品制作に対する姿勢や審査の思いを伝えた。第2部では安野さんは応募動機、松本さんは入選が縁で広がった活動について語った。

in 名古屋



2019年2月9日 会場:愛知芸術文化センター, 参加者:約50名
ゲストメンバー:
第1部 藤森照信(AAIC2020審査員)、佐藤昌宏、高橋綾子(AAIC企画委員)
第2部 耳のないマウス(AAIC2017三輪眞弘賞受賞)

第1部では藤森さんが映像を使いながら自身の作品についてエピソードを紹介し、審査への期待を語った。第2部では耳のないマウスの方々が制作上の苦労や解決方法を語り、来場者へ応募を呼びかけた。

in 福岡



2019年2月17日 会場:イムズ, 参加者:約30名
ゲストメンバー:
第1部 川口隆夫(AAIC2020審査員)、河西栄二、衣笠文彦、三輪眞弘(AAIC企画委員)
第2部 三枝愛(AAIC2017 OJUN賞受賞)、水無瀬翔(AAIC2017鷲田清一賞受賞)

第1部では4人のクロストークのほか、川口さんがダンスパフォーマンスでAAICの審査に対する想いや期待を表現。第2部では作家のお2人が作品制作時のプロセスなどを紹介。AAIC2020にも応募することを宣言した。

in 京都



2019年3月9日 会場:マテリアル京都, 参加者:約55名
ゲストメンバー:
第1部 篠原資明(AAIC2020審査員)、青木正弘、安藤泰彦(AAIC企画委員)
第2部 中村潤、三木陽子(AAIC2017入選)

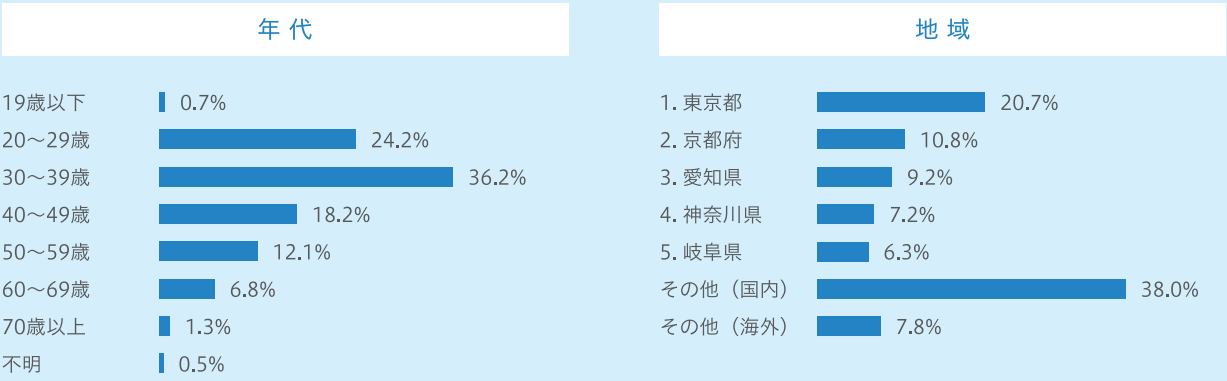
第1部では、篠原さんが哲学者の立場から第2回のテーマ「記憶のゆくえ」をキーワードに、新しみつつ振り返るアートのあり方についてトーク。第2部では作家のお2人が審査員の顔ぶれを見たときの感情など、応募の際のエピソードを紹介した。

092

093

応募状況

海外を含む各地から710件の応募があった。10代から70代まで幅広い年齢層が応募しており、20代～30代の応募が全体の60％を占めた。英語版の公募要項やウェブサイトからの応募に対応した結果、前回のAAIC2017と比べ、海外からの応募が3倍に増えた。国内にとどまらず海外の作家からの注目度が高まったことがうかがえる。



一次審査

2019年8月9日
会場：都ホテル岐阜長良川

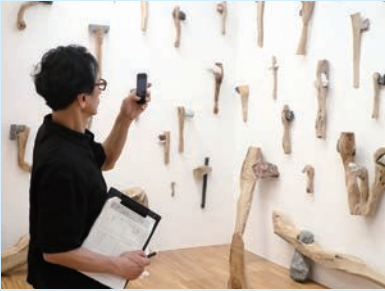
一次審査当日は、さまざまな分野の第一線で活躍する7名の審査員が集結。会場には710点におよぶすべての企画書が並べられた。事前に審査員が推薦した企画書には審査員ごとに色分けしたシールが貼られ、シール付きの企画書を中心に、映像・マケットもあわせて審査した。なお、今回から県図書館の屋外でも展示。美術館だけでなく、外での展示においても調整の必要なプランや作品の安全性、法令等の問題点などの実現可能性について審査を行った。審査は応募者の名前・略歴等は伏せて実施。熱い議論の末、18組の入選作家を選定した。



二次審査

個別審査
2020年6月2日～7日
会場：岐阜県美術館・岐阜県図書館

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、7名の審査員たちは個別に会場入り。会場に展示された18組の入選作品を見て回った後、大賞と審査員賞の投票を行った。



TV会議
2020年6月14日
会場：岐阜県図書館

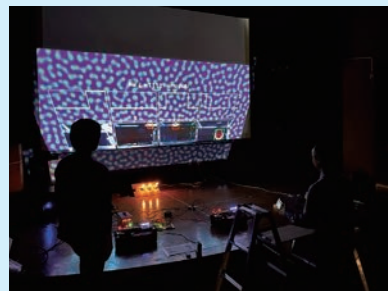
個別審査での投票結果を受け、TV会議システムで二次審査を実施。冒頭で全審査員における投票結果が示された。長時間にわたり熱心に議論した結果、大賞と審査員賞が決定した。



作家支援

Art Award IN THE CUBE 2020では、これまでの実績を問わず企画書での選考という審査方法で新たな才能を見いだした。一次審査を通過した18組は、企画書で訴求したアイデアや試作をさらに深掘りし、テーマである「記憶のゆくえ」を表現した作品制作を行う。与えられたキューブという条件の中でのアイデアの実現化、構造や展示するうえでの制約において、制作費の補助、作家の作品制作をサポートするファクトリーチームなど、さまざまな面から支援した。

1. 入選者には制作費を入選賞金(50万円)として支給
2. 作品制作・展示に関わる技術的な相談事への支援
3. 出品者の作品制作・展示に関わる外部協力者(岐阜県内企業・団体など)の紹介
4. 岐阜県美術館・岐阜県図書館での作品設置に関わるサポーターの制作補助



AAICサポーターズ(ボランティア)活動

2回目となるArt Award IN THE CUBE 2020の開催にあたり、作品制作や展覧会運営などをサポートするボランティアを募集したところ、延べ64名の応募が集まった。残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、作品制作の途中で活動は中止となってしまったものの、延べ37名の方に参加いただいた。



関連プログラム

展覧会PRの一環として、作家が作品や作品コンセプトを伝えるワークショップや前回審査員の講演会などの関連プログラムを実施。各作家のインタビュー動画、プロフィール紹介など作品情報についても発信した。なお、会期中に予定されていたワークショップや学校観賞バスツアーについては、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い中止となった。

01

オリジナル行燈づくり

美濃和紙キューブアート

2019年9月14日・15日・16日
会場: アクティブG, 参加者: 124名

2019年11月3日
会場: 岐阜県美術館、岐阜県図書館, 参加者: 41名

AAIC2020を広く知ってもらうため、思い思いの絵を描いた美濃和紙を、木枠でできたキューブに貼る、行燈づくりのワークショップを開催。お子様からご年配の方まで、モノづくりに興味をお持ちの多くの方にご参加いただき、ペンや色紙を使って四季を表現したり、岐阜の風景を描いたりなど、オリジナルの行燈を完成させた。参加者からは「岐阜の和紙など伝統的なものを利用した

アートで素敵だった」、「親子で参加できてよかった。芸術祭に行きたいと思った」、「作品として展示されるのが楽しみ」、「このようなプログラムにまた参加したい」など満足の声をいただいた。制作した行燈はAAIC2020の会期中に展示する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い中止となった。



02

アートと触れ合う

作家ワークショップ

岐阜県内でそれぞれAAIC2017及びAAIC2020の入選作家によるワークショップを実施。子どもたちはアートに気軽に触れられるこの機会に、自由な発想で、思い思いの作品をつくり上げた。

多治見

なかむら めぐ
中村 潤

影をつくる素敵な道具づくりワークショップ
「光をつかむカタチ」

2019年8月18日

会場：セラミックパークMINO, 参加者：親子14組

セロファンや紙、ひもやプラスチックなど、材料を自由に選んで制作。影を壁にうつし、動かしたり揺らしたりして確かめながら、お気に入りの影ができる素敵な道具づくりに取り組んだ。

参加者からは、「好きな色がきれいに影になっていて面白い」、「展示を見るだけだと思って来たので、こういう場所があってよかった」といった声が聞かれ、感性をくすぐるワークショップとなった。

高山

ちゅうちゅう
宙宙

水の流れを描きながら、海へと下り旅をしよう。
「水になる」

2019年11月10日

会場：飛騨・世界生活文化センター, 参加者：13名

地図にある等高線を読み、地図には描かれていない豊かな水の流れを浮き上がらせる。数名のグループに分かれ、水系をペンでなぞりながら図郭を完成。

最後は1つの作品に繋ぎ合わせ、水が流れていく感覚や美しい大地を感じた。

参加者からは、「むずかしかったが、みんなの絵ができた時とてもきれいにつながってよかった」、「自分が住んでいるところの水の流れがわかってよかった」など、満足の声をいただいた。

美濃加茂

みしく いたる
御宿 至

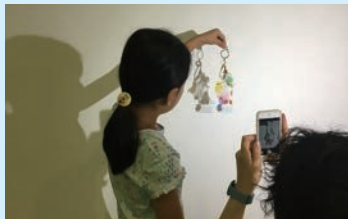
身近なモノで造形の楽しさを体感。
「日常の記憶を再構築しよう」

2019年11月23日

会場：みのかも文化の森 美濃加茂市民ミュージアム, 参加者：16名

日常で廃棄される「ゴミ」の中にある時代背景をも内包した物質、カタチなど面白い素材を再構築。講師や参加者は布キレや包装紙といった、無意識のうちに自分の記憶を含んだ素材を持ち寄り、魅力的な造形物をつくり上げた。

参加者からは、「家や学校ではできない体験を集中して行えてよかった」、「自由度が高い分難しいものの、自分のイメージを具現化できて楽しかった」と、作品制作を楽しんだ。



大垣

やまもと まりえ ひめの あや
山本麻璃絵 + 姫野亜也

自分だけの宝物をつくろう。
「石の発掘宝探し&宝箱作り」

2019年12月8日

会場：大垣市サイトピアセンター, 参加者：57名

室内に用意した砂場の中から自分だけの綺麗な石を見つけ出し、紙粘土でその石をおさめる宝箱、うつわをつくり上げる。

動物やハートなど石に合った形や色合いを考え、完成後の展示では魅力的な宝箱が並んだ。

参加者からは「自分で好きな石を選び、デザインを考え、集中して作ることができた」、「子どもたちが自分で考えて自由に作ることができて楽しそうだった」など、大変好評であった。



03

広大な知識と独自の視点から考察

高橋源一郎講演会 社会とアート

2020年2月11日

会場：岐阜県美術館, 参加者：146名

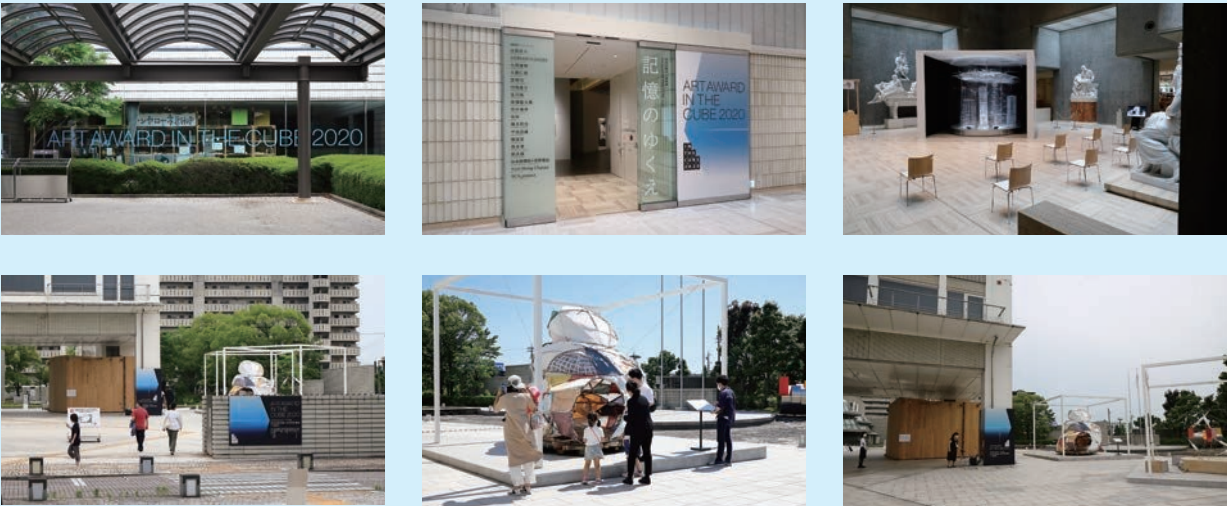
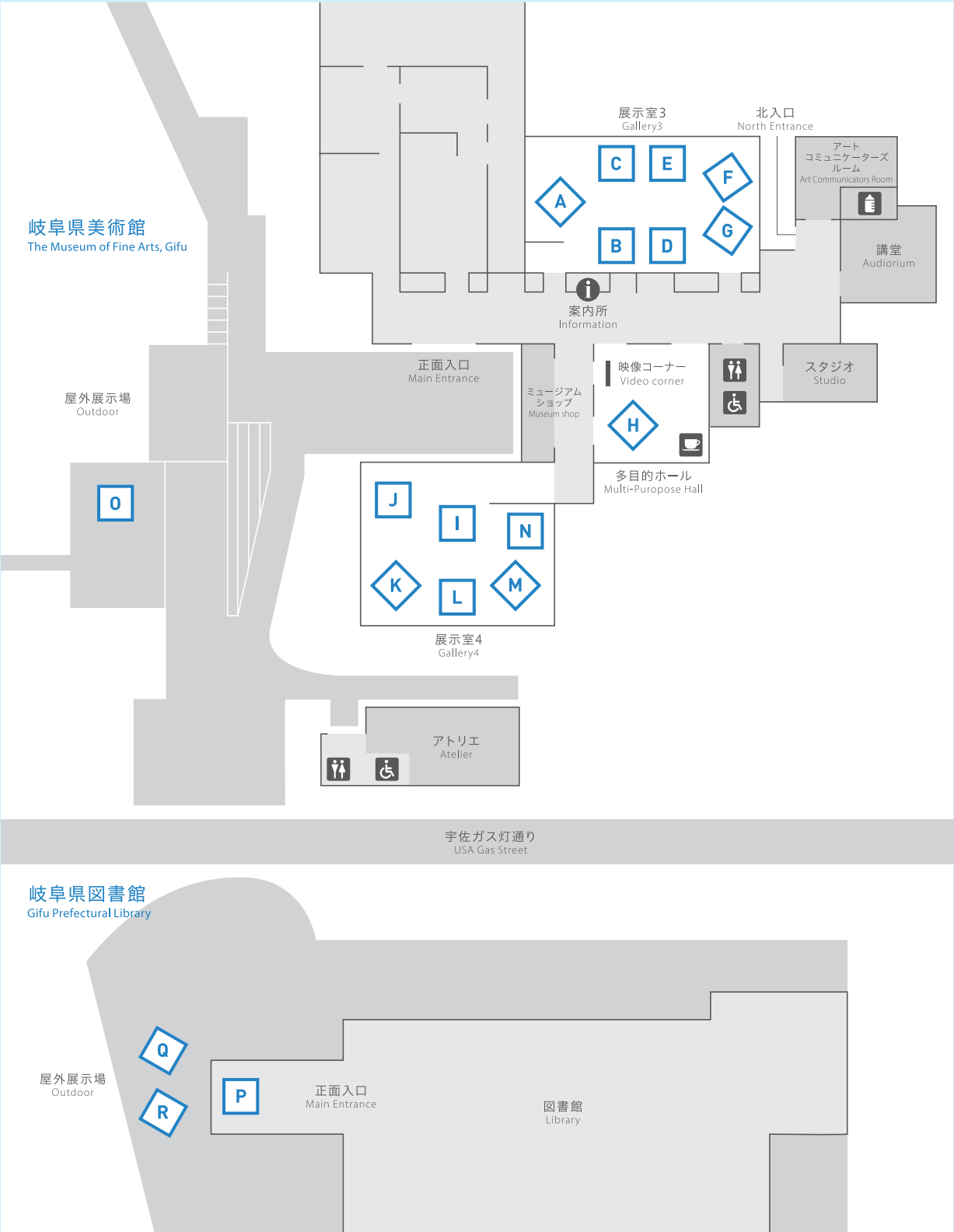
Art Award IN THE CUBE 2020の会場である岐阜県美術館において、AAIC2017の審査員も務められた小説家・文学者の高橋源一郎氏を迎え、その豊富な知識と独自の視点で「社会とアート」を語っていただいた。

参加者からは、「アートの奥深さがわかった」、「アートは社会がある限り必要なものと認識した」、「中身の濃いプログラムで、期待以上の話が聞けた」といった声が聞かれ、高橋氏の講演に熱心に耳を傾けていた。



展覧会概要

会期:2020年6月2日-7月5日
会場:岐阜県美術館・岐阜県図書館
来場者数:7,759名



- | | |
|---|--|
| A 大貫仁美《秘められた、その「傷」の在処》
ONUHI Hitomi《The whereabouts of the hidden "wound"》 | J 平田昌輝《Artifact 19-2》
HIRATA Masaki《Artifact 19-2》 |
| B 竹中美幸《記憶の音》
TAKENAKA Miyuki《Sounds of Memory》 | K 森本孝《そして、「宇宙の子」は、自ら造った「灰」に酔っているAIと対決する。》
MORIMOTO Takashi《And "The children of the universe" shall confront the "Slightly drunk AI" that they created.》 |
| C 大西康明《時間の溝》
ONISHI Yasuaki《Ditch of Time》 | L 山本麻璃絵+姫野亜也《石斧をモチーフにした石斧の彫刻》
YAMAMOTO Marie + HIMENO Aya《Stone axe sculpture with stone axe motif》 |
| D 御宿至《SOMETHING GREAT ～記憶の風景～》
MISHIKU Itaru《SOMETHING GREAT ～Scene of Memory～》 | M 笠原巧《無秩序の中の秩序》
KASAHARA Takumi《Order in disorder》 |
| E 宙宙《cloud》
chuchu《cloud》 | N 川角岳大《私たちの知らない犬》
KAWASUMI Gakudai《Our dog we don't know》 |
| F ADRIAN O.SALES《WE GO ON》
エイドリアン オー サレス《WE GO ON》 | O W.N.project《Light NOWーイマココ》
ワンニャー プロジェクト《Light NOWーRight NOW》 |
| G Yuni Hong Charpe《Repeat》
ユニ ホン シャープ《Repeat》 | P 保良雄《(beclouded, becalmed, belighted)》
YASURA Takeshi《(beclouded, becalmed, belighted)》 |
| H 北川純《質量保存の法則》
KITAGAWA Jun《Law of conservation of mass》 | Q 高橋臨太郎《Phantom container》
TAKAHASHI Rintaro《Phantom container》 |
| I 橋本哲史《こちら、1001》
HASHIMOTO Satoshi《This is 1001》 | R 占部史人《空とカタツムリ》
URABE Fumito《Sky and Snail》 |

新型コロナウイルス感染症対策

電話での事前予約制をとり、キューブ内へは介助者や家族など1組ごとの立ち入りに限定。さらに感染警戒QRシステムの導入、展示室入口等への消毒液や注意喚起パネルの設置など、徹底した対策を講じた。



オープニングセレモニー

2020年6月2日 9:45-10:00
会場:岐阜県美術館ホール, 参加者:約20名

緊急事態宣言の解除後、6月2日から、AAIC2020を開催。オープニングセレモニーでは、参加人数を制限し、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策が行われる中、主催者・来賓が挨拶。その後のテープカットでは、期待と喜びの笑顔が広がった。



表彰式

2020年7月5日 14:00-14:30
会場:岐阜県美術館講堂, 参加者:約60名

岐阜県美術館で行った表彰式は、参加人数を制限し、入賞作家、審査員、企画委員会などの関係者、来賓など約60名が参加。古田肇 岐阜県知事の挨拶でスタートした。審査員はAAIC2020や入賞作品への感想を語った。



Chapter

3

IN THE CUBE 2020

清流の国ぎふ芸術祭
Art Award IN THE CUBE 2020

清流の国
Art Award

芸術祭
IN THE CUBE 2020

IN THE CUBE 2020

清流の国ぎふ芸術祭
Art Award IN THE CUBE 2020

IN THE CUBE 2020

スケジュール



2018年	
7月24日(火)	Art Award IN THE CUBE 2020 開催概要決定
9月11日(火)	公募要項発表
2019年	
1月25日(金)~5月13日(月)	作品応募受付
1月13日(日)	Art Award IN THE CUBE 2020 トークイベント・公募説明会in東京 3331Arts Chiyoda
1月26日(土)	Art Award IN THE CUBE 2020 トークイベント・公募説明会in岐阜 岐阜県図書館
2月9日(土)	Art Award IN THE CUBE 2020 トークイベント・公募説明会in名古屋 愛知芸術文化センター
2月17日(日)	Art Award IN THE CUBE 2020 トークイベント・公募説明会in福岡 イムズ
3月9日(土)	Art Award IN THE CUBE 2020 トークイベント・公募説明会in京都 マテリアル京都
8月9日(金)	一次審査会 都ホテル岐阜長良川
8月18日(日)	ワークショップ「光をつかむカタチ〜影をつくる素敵な道具づくり」(講師:中村 潤)セラミックパークMINO
9月14日(土)~16日(月・祝)	ワークショップ「美濃和紙キューブアートでAAIC2020に参加しよう!」アクティブG(GIFUクラフトフェア)
9月18日(水)	一次審査結果発表
9月24日(火) ~2020年1月17日(金)	ボランティア募集
11月3日(日・祝)	ワークショップ「美濃和紙キューブアートでAAIC2020に参加しよう!」岐阜県美術館、岐阜県図書館(文化の森の秋祭り)
11月10日(日)	ワークショップin高山市「水になる」(講師:宙宙)飛騨・世界生活文化センター
11月23日(土・祝)	ワークショップin美濃加茂市「日常の記憶を再構築しよう」(講師:御宿 至)みのかも文化の森 美濃加茂市民ミュージアム
12月8日(日)	ワークショップin大垣市「石の発掘宝探し&宝箱作り」(講師:山本麻璃絵+姫野亜也)大垣市スイトピアセンター
2020年	
2月11日(火・祝)	高橋 源一郎 講演会「社会とアート」岐阜県美術館
3月23日(月)~26日(木)	キューブの設置
3月27日(金)~4月9日(木)	作品設置
4月3日(金)	「ストップ 新型コロナ 2週間作戦」知事メッセージ発出 岐阜県美術館休館(〜4/19)
4月5日(日)	清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020開幕延期発表
4月7日(火)	国の新型コロナウイルス感染症対策本部より東京都など7都府県に緊急事態宣言発令
4月10日(金)	岐阜県新型コロナウイルス感染症対策本部より非常事態宣言発出
4月15日(水)	非常事態宣言による岐阜県美術館休館延期(〜5/6)に伴い、清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020開幕再延期発表
4月16日(木)	緊急事態措置区域に岐阜県追加
5月4日(月・祝)	国の新型コロナウイルス感染症対策本部より、緊急事態措置延長発表
5月6日(水・祝)	清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020開幕再々延期発表
5月14日(木)	岐阜県の緊急事態措置区域解除
5月25日(月)	緊急事態宣言全面解除／清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020会期発表
5月26日(火)	大垣共立銀行・十六銀行 協賛金受領式及び感謝状贈呈式 岐阜県庁
5月29日(金)	内覧会(マスコミ)
6月1日(月)	内覧会(運営委員、実行委員、企画委員)
6月2日(火)	オープニングセレモニー開催 清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020開幕 二次審査会(個別審査(6/2~6/7)) 岐阜県美術館・岐阜県図書館
6月14日(日)	二次審査会(TV会議) 岐阜県図書館
6月18日(木)	二次審査結果発表
7月5日(日)	表彰式開催／清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE 2020閉幕
7月6日(月)~12日(日)	作品・キューブ撤去

広報



ポスターやチラシ、雑誌・Web広告、動画でAAIC2020を広くPR。

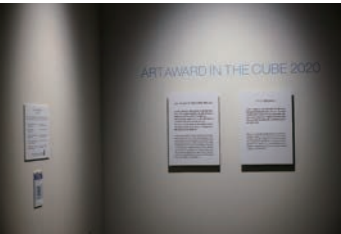
■会場



会場エントランス



審査員講評パネル



コンセプトパネル

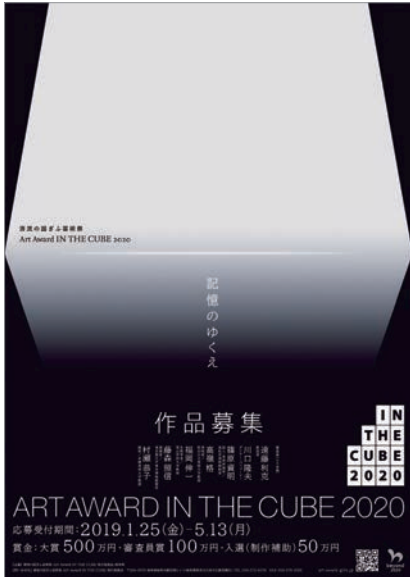


会場サイン

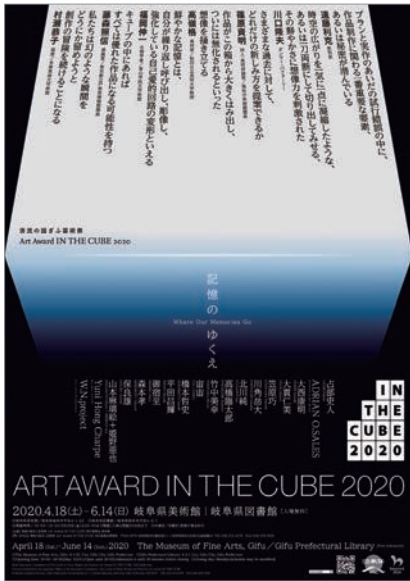


エントランスホールタペストリー

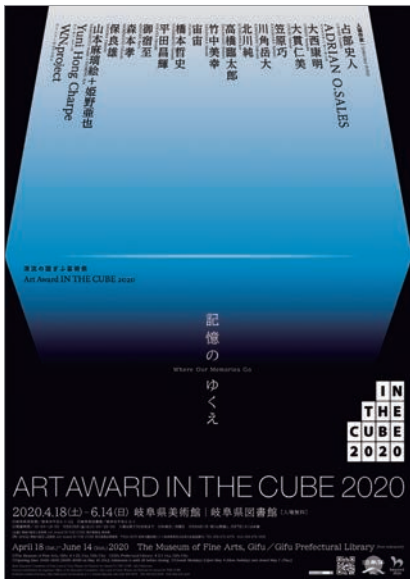
■ポスター／チラシ新聞・雑誌広告



公募募集ポスター



周知ポスター



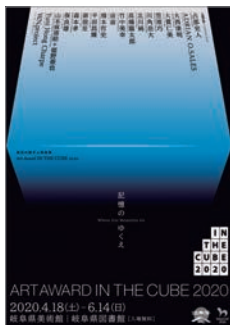
展覧会ポスター



プレイベントチラシ



ボランティア募集チラシ



作家紹介チラシ



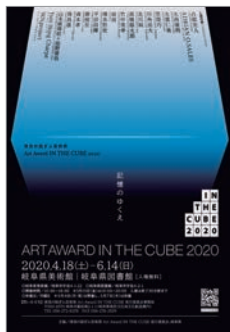
雑誌広告



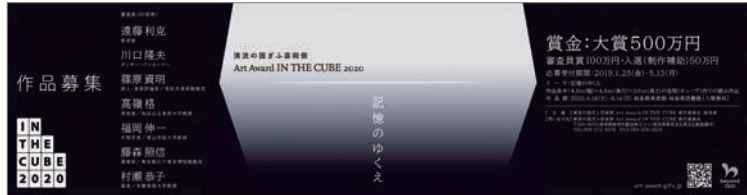
ワークショップ募集チラシ



トークイベントチラシ



雑誌広告



新聞広告



ガイドブック



クリアファイル



新聞広告



トートバッグ

■公式ウェブサイト



■Web広告



■動画

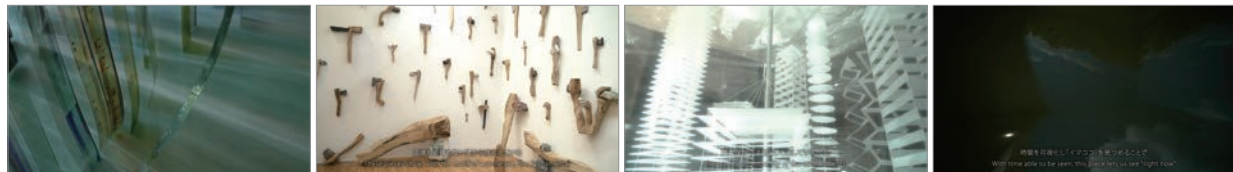
作家紹介

展覧会に興味を持っていただき、来場を促進するために、まだ制作途中の作家へ取材して、完成に向けた想いや意気込みを動画にしました。

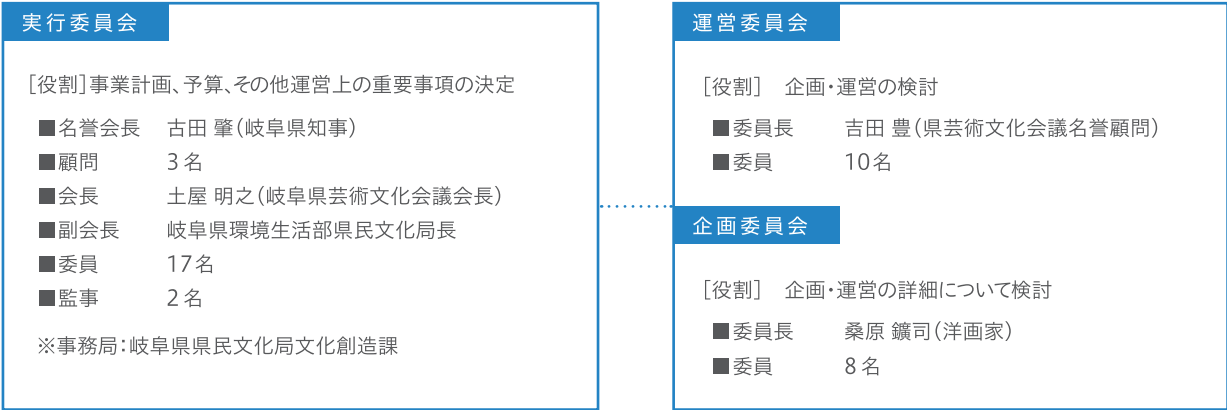


作品介绍

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じた上での開催となった清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020。ご来場いただけない方々を含め、より多くのみなさまに作品をご鑑賞いただく機会を提供するために作品紹介動画を制作しました。

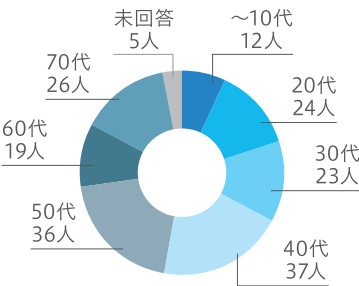


運営体制

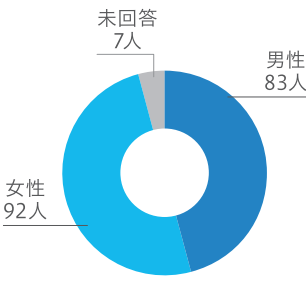


来場者アンケート

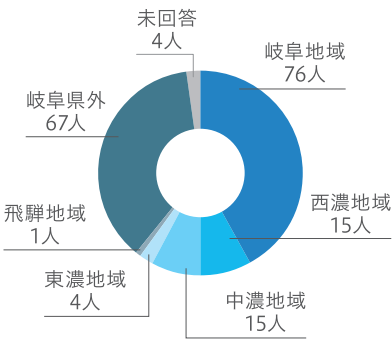
1.年齢



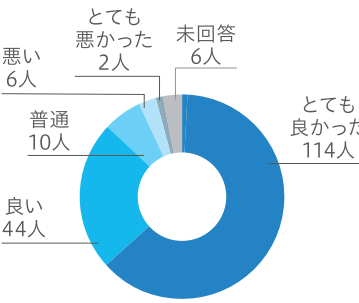
2.性別



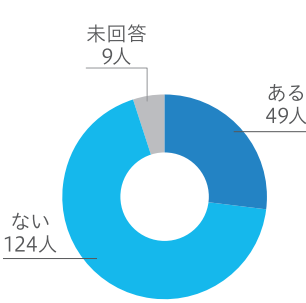
3.お住まいの地域



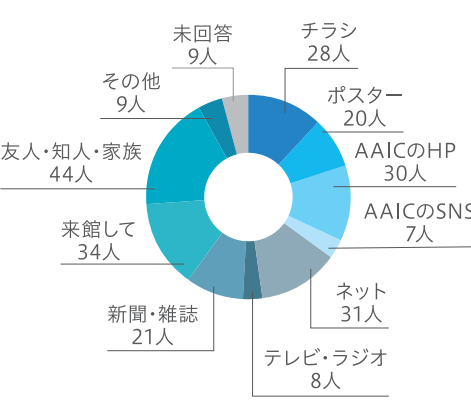
4.AAIC2020をご覧になった感想をお聞かせください。



5.前回のAAIC2017を鑑賞されたことがありますか。



6.AAIC2020をどちらでお知りになりましたか。



対象者: AAIC2020の来場者
調査方法: 会場内にアンケートコーナーを設置。紙面による任意のアンケート調査。
回答数: 182件

自由記述欄抜粋

- ・クオリティが高く、いろいろな作品を観ることができた。一つ一つの作品が分かりやすく、内容も読み取りやすかった。
- ・バリエーションに富んでいる。知らない作家の作品が大きなスケールで観ることができた。
- ・前回は四角を全面に使っている感じと、他の場所で既に評価されている方が多いようでバランスが取れている感じ。今回は前回とは違う面白さがあった。
- ・風や暑さのため、作品をちゃんと観ることができない。鑑賞者も不幸。
- ・常に考えてもない物が芸術品となる不思議さに驚いた。
- ・内容は良いが、岐阜の人ほとんど知らない。残念。
- ・コンセプト及び説明が分かりにくい。
- ・記憶というものに改めて思いを馳せる空間に出会えた。美しい空間でもあった。
- ・Cubeの中という狭い空間にも関わらず、世界が広がっていく。それぞれのCubeを外から観たときよりも、中で感じた空間がとても広く感じた。
- ・岐阜県文化イベントの中心的存在として、この展覧会を継続して欲しい。末永く続けて欲しい。
- ・屋外と屋内の人のリスクが違いすぎる。
- ・cubeの概念と選考基準が前回よりも曖昧になっているような気がする。



Art Award IN THE CUBE 2020 を終えて

桑原 鑛司
(Art Award IN THE CUBE企画委員会委員長)

Art Award IN THE CUBE 2020の作品応募は2019年5月13日に締め切られ、8月9日の一次審査会で710点の応募作品から18点の入選が決定した。2020年の4月上旬には作品の制作、設置も終わっていたが、思いもよらぬコロナ禍によって、その後の予定は大幅に狂った。会期中の入選作家によるワークショップ、審査員の講演やトークセッション、小中高の学校の見学会などがすべて中止、一時は展覧会の開催そのものまで危ぶまれる状況であった。幸いにもそれは免れることができたが、開幕は一ヶ月半遅れ、会期も6月2日から7月5日までの約一ヶ月、当初の計画の約半分ということになった。県境を超える移動に自粛が要請され、海外在住者からの応募も55点に増え、そのうち入選者も2名あったにもかかわらず、海外はおろか県外からの観客すら期待できない状況は、作家はもとより関係者全てにとって辛いことであった。大賞、審査員賞を決める二次審査については審査員に作品鑑賞の必要があり、開幕後個別に来館を乞い、6月14日オンライン会議で審議をし決定を見た。結果発表は会期中の6月18日、表彰式は展覧会の最終日に行われるということになり、何もかもが異例の展開となったがやむを得ないことであった。

前回のAAIC2017を終え今回に向けて掲げた課題は審査方法の改善であった。一次審査で審査員に790点の応募作品の書類審査を全てお願いしたことは、いかにも負担が大きすぎた。また出来上がった作品ではなく、一次資料、即ち書類(作品のコンセプト)、スケッチ、マケット、DVDによる審査で本当に良い作品が選ばれていたか、見逃されていたか、という思いが拭えなかった。より良い方法を求め続けなければならないと強く思った。二次審査は完成作品を見てから行うので問題はない。難しいのは一次審査である。

今回、企画委員会の委員9名による予備審査では、各委員一人50点程度の候補作品を選び、集計すると290点となった。これに、会場となる美術館・図書館の展示環境を損なう可能性のあるものなど29点をリストアップし、これらを参考資料

として710点全ての書類と共に審査員に提出した。しかしこのことが審査員の負担軽減にどれほど役に立ったかはわからない。結局は各審査員が全ての書類に目を通されたようであった。一次審査についてはなお検討の余地がある。

次に、まず作家側の問題として、一次資料によるプレゼンテーションに巧拙の差が顕著に見られたことはいささか気にかかることであった。それはプレゼンテーションの重要性についての認識の差に起因するもののように思える。改めてプレゼンテーションの重要性を指摘したい。当公募展では一次審査に通らなければ先はないし、一次審査は完成作品を見て行われるものではないのでプレゼンテーションそのものが力のあるものでなければならない。一方、企画委員会としては公募要項の内容を検討しブラッシュアップする必要がある。審査に必要な情報と作家が表現したい内容を過不足なく得られるようにするためにはどのような項目をどのような言葉で用意したら良いかを検討する必要がある。

最後にキューブに関する規定の変更について述べておきたい。今回は、制作の自由度を高めることによって多様な作品が現れることを期待し、キューブの壁、天井の撤去を可能とし、フレームのみの仕様も可とした。また屋外展示の作品も3点増やし、入選作品18点とした。屋外設置については作家の希望を優先した。この変更については作家側からも鑑賞者側からも様々な意見が寄せられたが、これらを参考に次回に向けてなお検討したい。屋外に作品を置く場合には、作家は雨、風、暑熱への対応を、使う素材も含めて十分留意する必要がある。この問題に関連して、主催者側の作家に対するサポートについて触れておきたい。制作に際してのサポートは本展の特長の一つであるが、その内容は複雑で多岐にわたる。技術的な面でも費用の面でも、また時間についても公平でなければならない。一元的には処理できない難しい問題ではあるが、作家が気持ちよく制作に当たれるよう努めていきたい。



発行年 2020年12月発行

編集 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会事務局

印刷 サンメッセ株式会社

発行 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会

© 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
無断転載・複写を禁じます。

本書では敬称を省略しております。
また、本書掲載の肩書きは2020年9月1日現在のものです。

助成 公益財団法人田口福寿会

協賛

OKB 大垣共立銀行

十六銀行

AAIC2020の
記録動画はこちらから

